

箱崎 51

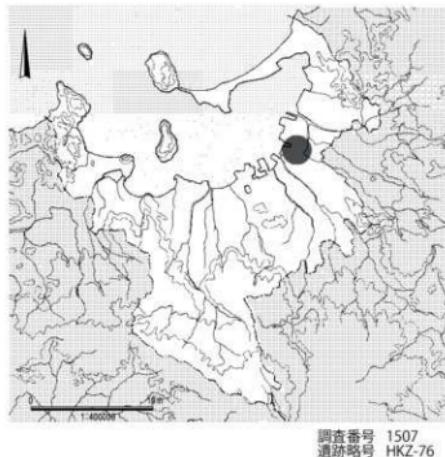
— 箱崎遺跡第 76 次調査報告 —

2017

福岡市教育委員会

は こ ざ き
箱 崎 51

— 箱崎遺跡第 76 次調査報告 —



2017

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との交流の窓口となってきた博多湾沿岸には、それを物語る重要な埋蔵文化財が各所に残されており、箱崎遺跡もその一部を成すものであります。

福岡市では、工事等により現状での保存が不可能となった埋蔵文化財について、記録による保存を図ることとし、そのための発掘調査を行ってきました。本書は、この目的で東区箱崎一丁目地内において実施した箱崎遺跡第76次調査の報告書として刊行するものです。

本報告の刊行は、関係各位の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力の結果であることをここに記し、心よりお礼申し上げます。また、本書が福岡平野の歴史について理解を深めるための資料として資するところがあれば幸いです。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会
教育長 星子明夫

はじめに

- 1 本書は、2015（平成27）年度、福岡市東区箱崎一丁目地内において福岡市教育委員会がおこなった、箱崎遺跡第76次調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、福岡市教育委員会が文化財保護法第93条に基づく届け出を受け、埋蔵文化財保存についての協議を行った結果、事業者の委託により、記録保存を目的として、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（当時、平成28年度から埋蔵文化財事前審査課を併せて埋蔵文化財課、以下同じ）が担当して実施したものである。作業は、事業者である株式会社岡部不動産を始めとした関係各位のご理解とご協力のもと、円滑に遂行することができた。この場で深く感謝申し上げる。
- 3 発掘調査及び報告は、埋蔵文化財調査課（当時）杉山富雄が担当した。
- 4 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡例

- 1 位置の記述は、国土座標（世界測地系）に依った。
- 2 図中に用いる方位は国土座標の座標北である。
- 3 報告中の遺構・遺物番号は、それぞれ登録番号を用い、調査現場での記録から整理、収蔵まで一貫して管理し、台帳・実測図・日誌等調査記録に記載した情報と極力関連づけておくことに努めた。記述中、必要に応じて遺構には「M」、遺物には「R」を付した登録番号を用いた。
- 4 文中、遺物の分量は、秤量したものではなく、調査に用いた容器（ポリ袋）を単位とした目分量による記述である。そのおよその分量は以下のようになる。小ポリ袋：0.5ℓ以下、中ポリ袋：小ポリ袋以上、1.5ℓ程度まで、大ポリ袋：中ポリ袋以上4ℓ程度まで。以上は遺物用コンテナを単位とするが、今回調査ではそのような分量で遺物を出土した遺構、部位はなかった。
- 5 陶磁器の分類は、山本信夫 2000『大宰府条坊XV～陶磁器分類編～』大宰府の文化財第49集（太宰府市教育委員会）を参考にした。

遺跡調査番号	1 5 0 7			調査略号	H K Z - 76
調査地籍	福岡市博東区箱崎一丁目 2804番地1			分布地図番号	3 4
事業地面積	669 m ²	調査対象面積	400 m ²	調査面積	370 m ²
調査期間	2015(平成25)年6月1日～2015(平成25)年7月14日				

目次

序	1
1 箱崎76次調査の概要	3
(1) 発掘調査の経緯	1
(2) 箱崎76次地点の立地と周辺の調査	1
2 箱崎76次調査出土の遺構と遺物	3
(1) 発掘調査	3
調査の経過	3
記録の方法	5
(2) 箱崎76次調査出土の遺構と遺物	6
出土遺構と遺物の概要	6
土壤	6

井戸 2	7
井戸 3	8
井戸 4	9
井戸 5	11
井戸 6	12
井戸 7	13
井戸 8	15
井戸 9	15
井戸 10	16
井戸 11	16
井戸 12	18
遺構 14	20
井戸 15	21
土壤 16	22
土壤 17	23
井戸 18	23
井戸 19	24
井戸 20	26
溝 21	27
土壤 22	27
井戸 23	27
採集及び地山出土遺物	27
3 おわりに	31

図 目 次

図 1 箱崎 76 次調査区位置図 (1:500)	iv
図 2 箱崎 76 次地点位置図 (1:50,000)	1
図 3 箱崎 76 次地調査区全体図 (1:200)	2
図 4 1 区全景 (北西から)	4
図 5 2 区全景 (北西から)	4
図 6 3 区全景 (北西から)	5
図 7 土壌 1 (1:40)	6
図 8 土壌 1 (北から)	6
図 9 土壌 1 出土遺物 (1:3)	6
図 10 井戸 2 (1:40)	7
図 11 井戸 2 出土遺物 (1:3)	7
図 12 井戸 2+3 (東から)	7
図 13 井戸 3+4 (1:40)	8
図 14 井戸 3 出土遺物 (1:1.1.3.1:4)	8
図 15 井戸 4 出土遺物 (1:2.1.3.1:4)	9
図 16 井戸 5+6+8 (1:40)	10
図 17 井戸 5+6+9 (東から)	10
図 18 井戸 5 出土遺物 (1:1.1.3.1:4)	11
図 19 井戸 6 出土遺物 (1.3.1:4)	12
図 20 井戸 7 (1:40)	12
図 21 井戸 7 (東から)	13
図 22 井戸 7 出土遺物 (1.3.1:4)	14
図 23 井戸 8 出土遺物 (1:3)	15
図 24 井戸 9 (1:40)	15
図 25 井戸 9 出土遺物 (1.3.1:4)	16
図 26 井戸 10 (1:40)	16
図 27 井戸 10 出土遺物 (1:3)	16
図 28 井戸 10 (南東から)	17
図 29 井戸 11 (1:40)	17
図 30 井戸 11 出土遺物 (1:2.1.3.1:4)	18
図 31 井戸 11 (北東から)	18
図 32 井戸 12+15 (1:40)	19
図 33 井戸 12+15 (北から)	19
図 34 井戸 12 出土遺物 (1.3.1:4)	20
図 35 井戸 14 出土遺物 (1:3)	20
図 36 井戸 15 出土遺物 (1.3.1:4)	21
図 37 土壌 16 (1:40)	22
図 38 土壌 16 出土遺物 (1:3)	22
図 39 土壌 16 (南西から)	22
図 40 井戸 17 (1:40)	23
図 41 井戸 17 出土遺物 (1.3.1:4)	23
図 42 土壌 17 (北東から)	23
図 43 井戸 18+19+20 (南から)	24
図 44 井戸 18 (1:40)	24
図 45 井戸 18 出土遺物 (1.3.1:4)	25
図 46 井戸 19+20 (1:40)	25
図 47 井戸 19 出土遺物 (1.3.1:4)	25
図 48 井戸 20 出土遺物 (1:3)	26
図 49 土壌 22 (1:40)	27
図 50 井戸 23 (1:40)	27
図 51 地山出土・採集遺物 (1:3)	27
図 52 3 区拡張部遺構 (北から)	28
図 53 土壌 22 (西から)	28
図 54 井戸 23 (西から)	28
図 55 箱崎 76 次調査出土遺物 (1)	29
図 56 箱崎 76 次調査出土遺物 (2)	30

表 目 次

表 1 調査遺構一覧	32
表 2 報告遺物観察表 (1)	33
表 3 報告遺物観察表 (2)	34
表 4 報告遺物観察表 (3)	35
表 5 報告遺物観察表 (4)	36
表 6 報告遺物観察表 (5)	37
表 7 報告遺物観察表 (6)	38
表 8 報告遺物索引	38



図1 箱崎76次地調査区位置図 (1:500)

1 箱崎 76 次調査の概要

(1) 発掘調査の経緯

埋蔵文化財事前審査 2014(平成26)年9月4日付けで、福岡市教育委員会宛て、福岡市東区箱崎一丁目 2804-1 地内で予定される共同住宅建築に伴い、同地内における埋蔵文化財の有無について照会があった。当該地は箱崎遺跡内に所在することから、文化財部埋蔵文化財審査課(当時)は、現状建物の解体に際して立会及び確認調査を行い、埋蔵文化財の遺存状況について確認を行った。その結果、工事予定範囲に埋蔵文化財が遺存することを確認した。これを受け、設計変更等による現状での保存についての検討を行った。しかし、予定建物の基礎が埋蔵文化財への影響を避けることができない構造であったことから、事業者の理解と協力を得て、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

発掘調査 発掘調査は、事業者の委託を受け、箱崎遺跡第 76 次調査(以下、箱崎 76 次調査とする)として、埋蔵文化財調査課(当時)が担当し、2015(平成 27)年 6 月 1 日着手した。発掘調査は建物により影響を受ける範囲を対象とし、対象区域を 3 区画に分割して廃土置き場を確保しながら進め、7 月 14 日現場作業を完了した。結果、調査面積は 370m² となった。遺物は、土器類のほかに木器類、石器類、金属器類を含みコンテナ 15 箱ほどが出土した。

(2) 箱崎 76 次地点の立地と周辺の調査

遺跡の立地 博多湾奥に沿って砂州が弧状に配列している。その上には砂丘が発達し、弥生時代以降、活動の場として利用されるようになってきた。箱崎遺跡も、そういった地形上に立地する遺跡である。ここでは、継続して集住が行われたことから、隣接する博多遺跡と同様、主に盛土を伴う土地の改変が進んだものと思われる。

既往の調査(図 1) 箱崎遺跡では、南北 1.2km、東西 0.5km の範囲に調査区が分布している。このうち、76 次調査地を含む遺跡中央部では、12 世紀から 14 世紀の間の遺構が多く分布する。

本調査地近辺には、南東に隣接して 64 次、その南に 67 次、東方に 44 次調査区が位置する。各調査区とも、整地層・包含層を挟んで遺構が重層的に確認された。調査は表土層下もしくは、上部の整地層下から開始して、2~4 面の調査をしている。現況表土層は、昭和初期の地形図と現況地盤高がほぼ一致することからすると、少なくとも近世末には形成されていたようである。調査面ごとに厳密な時期差をとらえることはできないが、上位の面では概ね 13 世紀後半から 14 世紀代の遺構が、下位の面では 11 世紀後半から 12 世紀代の遺構が確認されている。遺構には、井戸、土壙の他に柱穴があり、67 次調査では建物平面形の一部が復原されている。

64 次・67 次調査区で報告された土層断面は、遺跡地形を縦断する位置にある。それを見ると、地山砂層が 64 次地点から南の 67 次地点へ高くなり、更にその南端に向かって下り、北東の 44 次地点の地山高から、64 次調査区から北東へ高くなっているものとみえる。このように、砂丘稜線に直交するような凹凸があったことが推定される。この凹凸は包含層・整地層そして表土層により埋められているが、なお現在、筆界ごとの段差となって現存しているようである。



図2 箱崎76次地点位置図(1:50,000)

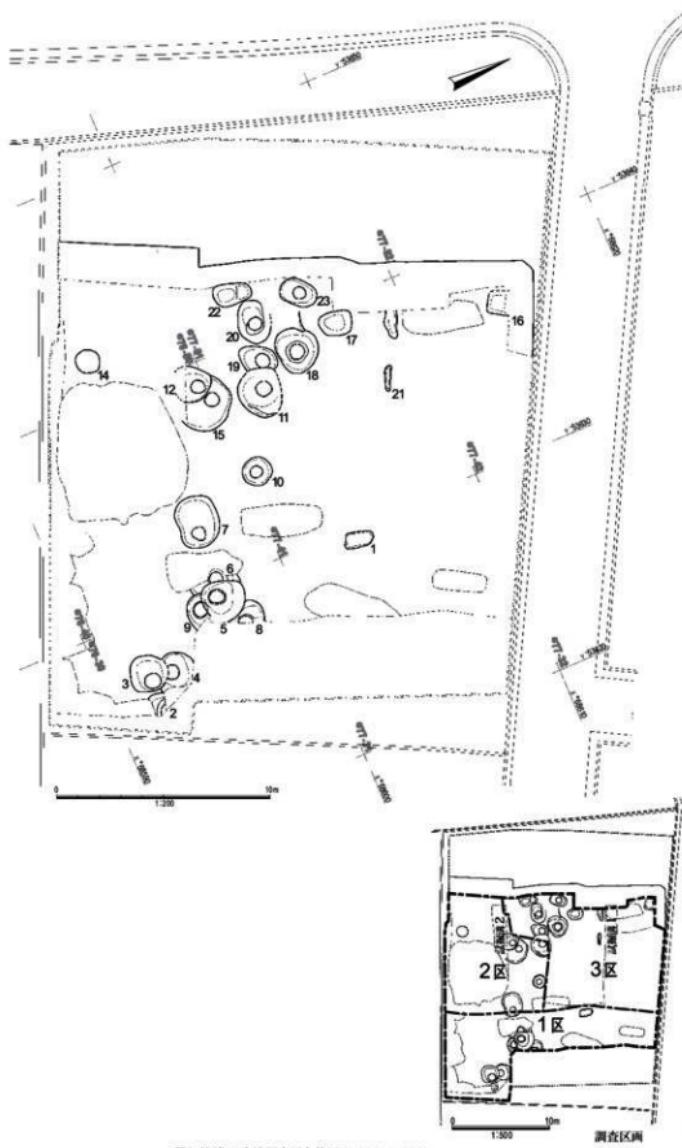


図3 箱崎76次地調査区全体図 (1:200・1:500)

2 箱崎 76 次調査の記録

(1) 発掘調査

調査の経過

基礎抜き取り工事中の立会、確認調査の成果から、埋蔵文化財が既存基礎下に遺存するものとして、基礎除去工事を完了後、現状地盤まで埋め戻しされた時点で調査に着手した。地盤高は標高 3.7 m 程である。発掘対象範囲は、工事範囲となる予定建物本体部と付属施設部分とした。発掘作業においては、廃土処理を場内で行うこととなった。調査地は、隣地が住宅であることから廃土を高く積むことができない上に、掘削深度が大きく廃土排出量が膨らんだことが加わり、その置き場の確保が問題となつた。このため、調査区を 3 区に分割し、廃土を反転しながら調査を進めることとなつた。調査では、建物本体部と付属建物との間は作業効率化のため、一体として掘り下げ、調査区に含めた。

周辺調査の成果から、調査対象地の東から西へ向かい遺構の分布密度が小さくなっていることが予想されたことから、調査は対象地南西側から着手することとした。

1 区の調査（図 3・5・6・7）

調査 1 区は、上述したよう事情から、廃土置き場を北東側に確保し、対象地西南部に沿って設け、突出した付属施設部を含めて進めたことから、北東～南西に帯状の幅の狭い調査区となつた。確認調査では、既存基礎下に暗褐色の遺物を含む黒褐色砂層を認めたが、本調査では確認できず、工事による掘削土が地山砂層まで続いていた。このため、調査は地山砂層を確認面とした。なお、調査前の図上の検討では、既存基礎に掛からない帯状の範囲に埋蔵文化財が良好に遺存するものと予想したが、既存基礎抜き取り工事に伴う矢板打設、及び抜き取り工事による影響が広く、調査 1 区を含めいずれの調査区においても遺存していなかった。

1 区の調査面は砂層上面の 1 面であるが、これも周辺調査区の成果からみると、かなり砂層を削り込んだ位置となる。砂層はこの面でもなお風成砂と見えるが、堆積の細層が顕著にみられ、傾斜して凹地を埋めるような堆積がみられる場所もある。1 区では、遺構から遺物が出土したほかに、地山砂層から小量であるが、遺物の出土があった。遺構検出面の標高は 1.2 ～ 1.5 m の位置にある。

2 区の調査（図 3・5・8・10・11）

1 区調査後の廃土反転時、調査区長軸に沿い東西方向に試掘溝 2 条を設定し、調査地西側への遺構の広がりについて確認を行つた。北側の試掘溝 1 では遺構、遺物は確認できなかつた。南側の試掘溝 2 では、1 区の井戸群から続き西方に向かう井戸の分布を確認することができた。

調査 2 区は上記の確認作業を経て、対象地西南部に設定した。1 区同様、廃土に規制されて狭小な調査区となつた。その広い部分を既存建物の抜き取りによる深い擾乱部が占めている。加えて、調査区の西側の重機搬入路確保のため、予定範囲まで拡張できなかつた。そのため、調査の最後に機械の取り回せる範囲について表土を鋤取り、遺構の確認を行つた。この拡張範囲では遺構を検出できなかつた。遺構検出面は、東の 1 区から西へやや下っており、標高 1.0 ～ 1.2 m の位置となる。擾乱周辺は標高 0.7 m まで鋤取つた。遺構は 1 区から連なる 4 基の井戸が帶状に分布するほか、やや離れた南側で円形の遺構 1 基を検出した。遺物は、遺構から出土したほか、地山砂層面から極小量の遺物が出土した。

3 区の調査（図 3・5・9）

調査対象地北西部にあたる。先の調査区が狭小なものとなつたことから、北側試掘溝から対象範囲北辺（矢板壁）の間について先に表土を鋤取り、遺構を検出した北西端部のみを残して埋め戻し、廢



図4 1区全量(北西から)



図5 2区全量(北西から)



図6 3IK全景(北西から)

土置き場として利用することとした。その後、残る中央部について鋤取りを行い、調査3区として発掘を進めた。3区でも重機進入路のため予定位置まで表土鋤取りを進めることができなかった。そこで遺構の集中する部分については、調査区を拡張し、遺構検出を行った。遺構検出面は標高1.2mの位置にある。遺構は2区から続き群在する井戸4基、それに近接した位置に土壤2基離れた北側に土壤1基のほか断片的に遺存する溝状遺構を1条を検出した。

記録の方法

調査にあたり、近隣の既知点に依り、国土座標系に沿った調査区画を設定し、平面図での記録、遺物出土位置の記録に用いた。各区画について、座標系の1km区画を10等分して100m区を設定、更にそれを10等分して10m区、更に5等分して2m区と設定した。各区画は座標南東隅を基準として、Y軸(西)方向の各区画の順番号を上の桁、X軸(北)方向の順番号を下の桁に組み合わせて2桁で表記した。今回調査では、100m区が1km区内の西へ7列目の北へ6・7段目にあることから、調査区画を示す「G」に続けて「76」・「77」、「以下10m区(2桁)・2m区(2桁)を続けて表記し、出土区画を記録した(例 G76-3052)。

遺構、遺物は今回調査(調査番号)を単位として、記録順に採番し、そのまま登録番号とした。また、各番号について、必要に応じて遺構には「M」、遺物には「R」を冠して区分した。遺物整理に際し、遺物については、個体として抽出したもの、接合のため抽出したものについては、新規に採番し、これを登録遺物番号に加え、抽出元との関係を追記して管理することとした。

結果として今回登録した遺構は22件、遺物は280件となった。

(2) 箱崎 76 次調査出土の遺構と遺物

出土遺構と遺物の概要

調査区は、現在の街区に沿った形状となっているため、方位と斜交する。調査区は東西壁間（正確にはそれぞれ東南東、西北西に面する）が 15 m で一部 20 m、南北壁間（北北東、南南西に面する）が 22 m の規模である。上部に存在したと思われる包含層・整地層及びそれに掘り込まれた遺構は、既存構造物等により破壊され、地山面に深く掘り込まれた遺構面のみが遺存していた。

遺構は、地山砂層をやや削り込んだ、標高 1.0 ~ 1.2 m の調査面で検出した。箱崎 64 次調査区から続き、帯状に群在する井戸が、調査地北の現状道路に平行するように西北西方向に分布している。その分布範囲は調査区外に続くよう見える。井戸は、井側の数にして 16 基を検出した。井戸の分布から南に離れた位置に円形の井戸状の遺構 1 基が分布する。

井戸の分布と異なる位置、また離れた位置に土壤が分布する。

土壤は 5 基を検出した。痕跡的に遺存する溝状の遺構を 1 基検出した。遺物は、上記のような条件から、地山砂層出土のものが極小量あるほかは、上記遺構からの出土である。土師器をはじめとする国産の土器、陶器のほか、輸入陶磁器が同程度出土した。ほかに下駄・曲物をはじめとした木製品、刀・釘等の金属製品、石鍋等の石製品が主として井戸から、中でも井側覆土中から多く出土した。

以下、遺構番号順に、遺構及び出土遺構を報告する。報告中、遺物については概要を留め、個別の詳細は別表（表 1 ~ 7）に示す。

土壤 1 (図 7・8)

他の遺構とは離れて、調査区東辺部近く G77-31 区に位置する。確認面は標高 1.4 m。長軸を北北西方向にとる。不整な長方形形状で、浅い。覆土は粗砂混じりのにぶい黄褐色砂で、全体に均質である。長さ 1.3 m、幅 0.7 m。深さ 0.2 m を測る。覆土中から小量の土器が小量出土した。

土壤 1 出土遺物 (図 9、表 1)

土器はいずれも細片資料である。土師器には、糸切底土師器皿のほか、丸底杯がある。瓦器碗は薄い口縁部破片が出土した。

図 9 に土師器杯 192 を示す。内外面から口唇部に及ぶ箇磨き調整を行なう。内面は平滑で球面となっている。体部中程の内外面に薄く黒褐色の付着物が残る。

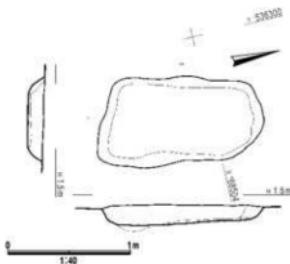


図7 土壌1 (1:40)



図8 土壌1 (北から)

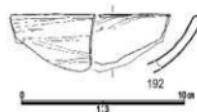


図9 土壌1出土遺物 (1:3)

井戸 2 (図 10・12)

調査区東辺部、G76-30 区に位置する。井戸 3・4 と重複して一群をなしている。調査区外周の矢板部に掛かり、かつ工事による搅乱で 1/4 周が遺存するのみである。掘方は擂鉢状で、平面は歪な円形か。掘方底面から最下段の井側を設置している。井側は結桶で、下端部の外面を斜めに削ぎ取っている。井側の遺存する位置をやや下った高さが、現状の涌水点となっている。涌水量が著しく、井側内を掘り下げる過程で井側が崩壊したことから、下部の状況は確認することができなかった。井側下部の状況は、下端部高から推測して図示する。掘方は標高 1.2 m の位置で検出した。掘方底面は標高 0.8 m、井側下端部は標高 0.2 m の位置にある。

掘方、井側内から遺物が散漫に出土した。多くは細片の土器類である。遺物は 14 世紀代までの資料を含む。

井戸 2 出土遺物 (図 11, 表 1)　出土部位ごとの遺物の構成は以下のようなものとなる。

[堀方] 土師器環・皿細片、青磁(龍泉窯系 II 類)、陶器(無袖、瓶か)。

[井側内] 土師器(糸切底土師器環・皿)、白磁(碗)。

図 11 に図示するのは、井側内出土の土師器糸切底皿 193 である。

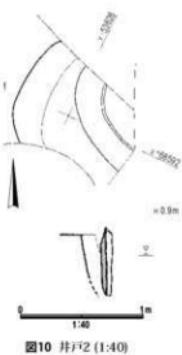


図10 井戸2 (1:40)

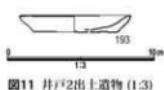


図11 井戸2出土遺物 (1:3)



図12 井戸2・3・4 (東から)

井戸3（図12・13）

井戸2・4と一群を成す井戸で、井戸2・4と重複して、いずれよりも新しい。平面不整な円形、擂鉢状の掘方底から最下段の井側を掘えている。井側は結構で、部材下縁部は削ぎ取らない。井側は、井戸2同様、涌水のため下端部の状況を確認することができず、下端高により推測し、模式化して図示する。以下、今回調査した井戸については涌水による崩落のため、同様に井側下端部高から推測、模式化して図示するものである。井戸3の掘方は標高1.0mの調査面で確認した。径1.8m、底面は標高0.5mの位置にある。井側は掘方底面の東に寄った位置に設置する。遺存する最下段井側は円錐台状で、平面形が円形。上端部の径0.7m、下端は標高0.2mの位置となる。掘方の下部覆土は褐色で細砂混じり粗砂である。

井側内は、にぶい黄褐色(10YR 5/3)砂と

黒褐色砂(10YR 5/3)との互層で埋まり、間に黒褐色粘土(10YR5/3)を挟む。井側内、掘方覆土中から遺物が大ボリ袋程の分量出土した。土器類は細片若しくは小破片資料である。遺物の年代は14世紀代までか。

井戸3出土遺物（図14・56、表1）

出土した土器類は細片・小破片の資料が殆どであるが、器表は良好に遺存する。出土部位ごとの遺物の構成は以下のようなものとなる。

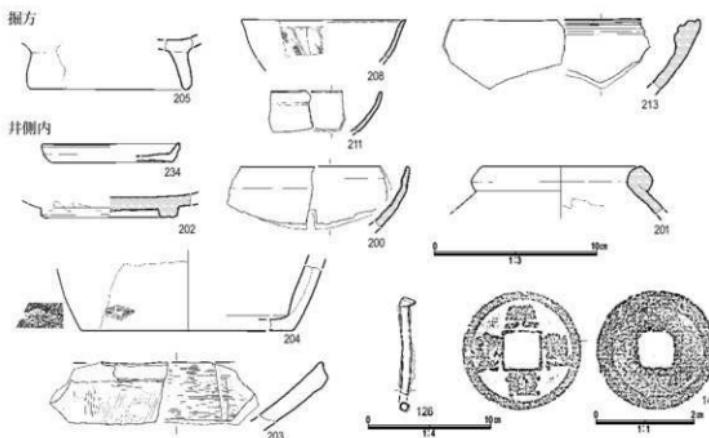


図14 井戸3出土遺物(1:1, 1:3, 1:4)

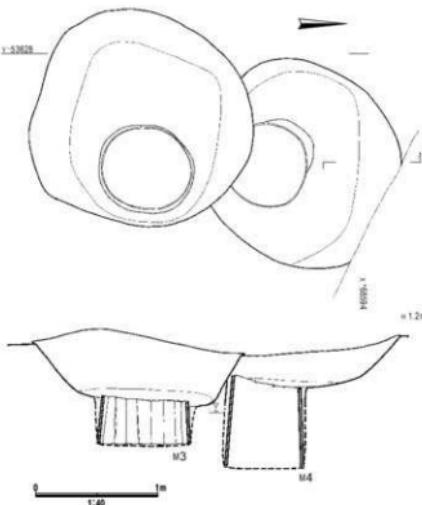


図13 井戸3-4(1:40)

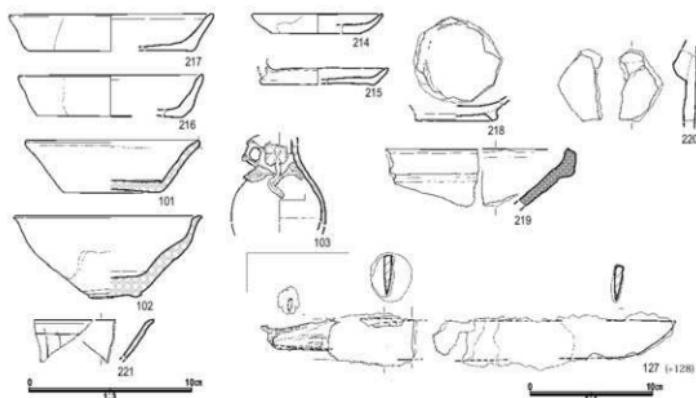


図15 井戸4出土遺物 (1:2,1:3,1:4)

〔堀方〕土師器(壺・皿は細片化、糸切底、大形で高い高台の器形)。須恵器(外面に平行叩き目痕ある壺、東播系捏鉢)。瓦器(碗)。白磁(碗V類、皿IX類、外面に白堆土)、青磁(龍泉窯系碗)、陶器(鉄釉、無袖の壺・甕の類)。金属製品(鉄釘)。

〔井側〕半ばは、陶磁器(大形品顯著)。土師器(甕若しくは鍋、火鉢、擂鉢。壺・皿なし)。須恵器(東播系捏鉢)。瓦質土器(擂鉢)。青磁(龍泉窯系小形碗)。越州窯系皿か;被熱、釉は発泡し詳細不明、内面に目痕、低い高台)、陶器(天目釉碗、黒褐色釉壺、ほかに甕等大形器の体部極細片)

図14に出土遺物を図示する。土師器高台皿205、白磁碗(X類か)208、越州窯系青磁小碗211、陶器鉢213は掘方出土である。井側内出土は、土師器糸切底皿234、天目釉陶器碗200、陶器甕201、瓦質土器火鉢204、瓦質土器擂鉢203、鉄釘126、「天聖元寶」14。

井戸4 (図12-13)

井戸3と重複して古い。井戸2との関係は攪乱のため不明である。G76-30区に位置する。掘方は、掘鉢状で、浅く残る。平面不整な円形。掘方底面から最下段の井側を設置する。井側は結桶で、下端縁部を削ぎ取らない。下端部が深い位置にあることから高く遺存する。井戸掘方確認面の高さ標高1.1m、径1.8m、同底部の高さ0.7m。井側は円筒形で、遺存する上端部の径0.6m、下端部は、確認前に崩落したことから推測値で標高0m前後。検出時は井側のみを確認したように掘方覆土上部は夾雜物が少ない砂であるが、下部は細礫混じりの黒褐色粗砂で埋まる。井側内はにぶい黄褐色砂と黒褐色砂の互層となっており、間に黒褐色粘土を挟んでいる。遺物は、すべて井側内から、大ボリ袋程の分量出土した。14世紀前半までの資料がある。

井戸4出土遺物(図15-55-56、表1-2) 土器の大半が細片であるなかに少数ながら大破片資料が混じる。土器の器表は遺存良好。遺物の構成は以下のようなものとなる。

〔井側〕土師器(糸切底壺・皿が大半。耳皿、丸底壺、重ね焼き状の痕跡を残す高台碗:「吉備系土師器」か)。瓦質土器(捏鉢、碗)。白磁(碗V類、皿IX類)。青磁(龍泉窯系碗II・III類)、青白磁(小形瓶)。天目釉陶器(碗)。瓦(繩目叩き平瓦)。金属製品(刀、棒状の工具)。自然遺物(種実)。

図15に、井側内出土遺物を図示する。土師器は、糸切底壺217・216、糸切底皿214のほか、耳

皿と思われる 215 を示す。極部分の資料であるが、折込部に笠状の工具で切り込みを入れた後、内側へ押し込んでいるように見える。218 は「吉備系土器器」か。胎土堅緻で内底面に輪状の目痕状の融着部が残る。白磁には口禿げ皿(IX類)101、碗(V 4c 類)221 がある。青白磁瓶 103 は、小形で、頸部に花文を貼り、彩色を施す。天目釉陶器碗 102 は、2/3 程が遺存し、他資料と比べて遺存部が格段に大きい。219 は東播系須恵器捏鉢である。220 は器形を復原できない。布目圧痕が残る粘土板に瘤状の突起を貼り付けた部位が遺存する。刀 127 は茎近くで分離し、切っ先側の部位が折れ曲がるが、锈の進行後のもので、調査時の損傷か。柄部に木質が収縮して遺存する。

遺物は、12 世紀から 14 世紀代までを示している。

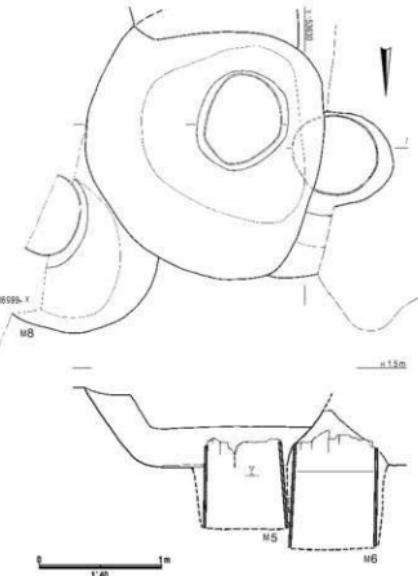


図16 井戸5-6-8 (1:40)



図17 井戸5-6-9 (東から)

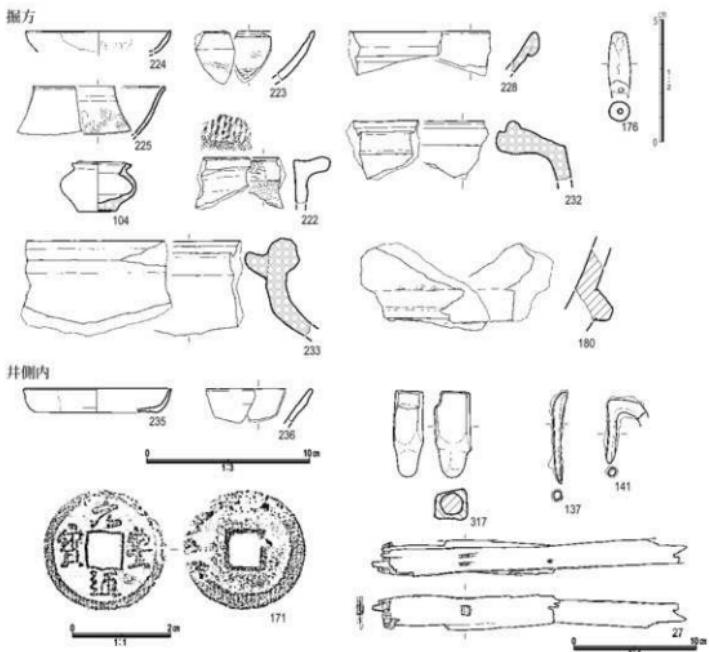


図18 井戸5出土遺物 (1:1, 1:3, 1:4)

井戸5 (図16・17)

調査区東辺に接し、井戸2～4の群に隣接して、井戸5～8・9からなる一群の井戸の1基であり、G76-30区に位置する。井戸6・8・9と重複し、そのいずれよりも新しい。掘方は擂鉢状で、平面では不整な円形状を呈す。掘方底面が平らでない。底面の西寄り、井戸6の井側に接するように最下段の井側を据えている。井側は結桶である。井戸5の掘方は、圧痕で残る井戸9の井側と重なる位置まで広がるが、確認面の深さでは井戸9井側を破壊していない。このことから、井戸5掘削時に井戸9井側が遺存しており、それを残置したままで井戸5掘方を掘り上げたものと考えることができる。一方井戸5掘方は井戸6井側と干渉し、井戸5井側は井戸6井側に接して設置され、井戸5掘方は井戸6の井側最下段上部を破壊し、掘削されている。このため、確認面では、井戸6の井側を検出することはできず、重複する搅乱の壁面での確認となった。

井戸5掘方は標高1.2 mの位置で検出し、径2.0 m、底面は標高0.7 mの位置にある。底面から最下段の井側を据えつける。井側は僅かに円錐台状となり、平面形が歪な卵形状で、長さ0.7 mの規模。下端部は標高0.2 mの位置にある。標高0.7 m以下は涌水のため詳細不明。井側覆土は、締まりのある灰色味をもった黒褐色泥(粘土)混じり砂と褐色砂の互層である。この点、重複する井戸5・6では泥土混じり部は殆ど無い。

遺物は掘方・井側から総量で大ボリ袋程の分量が出土した。13世紀後半までの遺物が出土した。

井戸 5 出土遺物 (図 18・55・56, 表 2・3) 土器類は小形製品を除き、細片資料であるが、器表の遺存は良好。遺物構成は以下のようなものとなる。

[堀方] 出土土器類の 2/3 が陶磁器である。土師器(糸切底の壺・皿、鍋)。須恵器(東播系捏鉢)。白磁(碗 IV・V 類、皿 IX 類)。瓦器(碗)。青磁(龍泉窯系碗 II 類、同安窯系碗)。陶磁器(甕 I・III 類)。

土製品(土鍾)。石製品(石鏡)。銅錢(「元豊通寶」)、金属製品(鉄釘)。自然遺物(魚骨)。鉄滓。

[井側] 中ボリ袋程の分量が出土。半ばが土師器で、陶磁器は極小量。土師器(糸切底壺・皿)。青磁(同安窯系碗)。陶器(甕もしくは壺)。金属製品(鉄釘、大小あり)。自然遺物(魚骨)。

図 18 に出土遺物を示す。図上部に掘方出土遺物を示す。224・223 は瓦器碗である。223 は柿葉型の瓦器碗とする。口唇部に向かって厚さを減じ、口唇直下の内面に沈線を施す。白磁碗には 228(IV 類)、225(X 類) がある。輸入陶器には、小形の甕 104、大形の甕 232(I 類)、233(III 類) がある。石鍋は鉗部細片 180 を示す(図は天地逆、したがって体部の開きも逆)。

図 18 下部に井側内出土遺物を示す。土師器は、糸切底壺 235、碗 236 がある。木製品も遺存していた。317 は、軸部部材か。角柱状の部材の先端部が乳頭状に丸みをもち、研磨されたようになっている。他端は面取りされている。曲物部材 27 は、側板の接合部断片である。171 は「元豊通寶」、137 は釘、141 は U 字釘状の製品か。

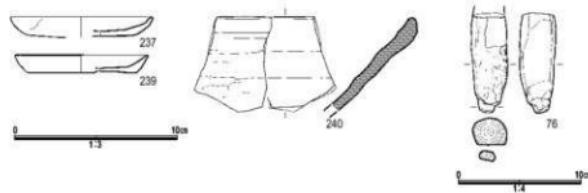


図19 井戸6出土遺物 (1.3.1.4)

井戸 6 (図 16・17)

井戸 5 ~ 8・9 からなる井戸群の 1 基であり、G76-30 区に位置する。井戸 5・9 と重複し、そのいずれよりも古い。井側の一部が上述したように井戸 5 により破壊されている。加えて西側も擾乱により破壊され、部分のみ遺存する。掘方形状は不明、井側部は遺存しており、やはり掘方底面から最下段の結構の井側を設置したことが判る。確認面は標高 1.2 m で、遺存部分から掘方の径 2.3 m とする。底面は井側に向かって勾配があり、最下段井側の掘方が他例より大きい。井側付近の底面は標高 0.7 m の位置にある。井側は円筒状、平面形が椭円形を呈して長軸長 0.7 m の規模、下端部が標高 0.1 m の位置にある。標高 0.7 以下は涌水のため詳細不明。井側内の覆土は褐色砂である。

遺物はすべて井側内から、小量出土した。含まれる遺物の時期は 13 世紀後半までか。

井戸 6 出土遺物 (図 20・56, 表 3) 土器類はすべて細片

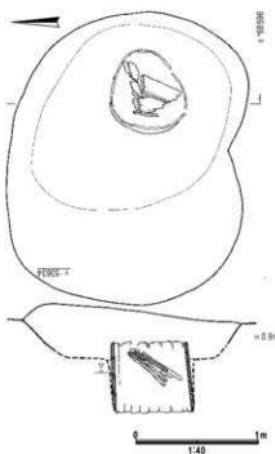


図20 井戸7 (1:40)

資料であるが、器表の遺存は良好である。遺物構成は以下のようなものとなる

[井側] 遺物はすべて井側出土。小量。土師器壺・皿が主。土師器(糸切底壺・皿、皿が顯著)。白磁、青磁、陶器。瓦(平瓦細片、両面焼し)。石製品(支脚か)。

図19に出土遺物を図示する。土師器には糸切底皿237・239がある。240は東播系須恵器捏鉢か。木器76は、片側を削いた丸木の先端部を段状に削っている。他端は折れている。

井戸7(図20・21)

井戸5～8・9からなる井戸群に隣接して、G76-40区に位置する。調査1と2区にまたがる。井戸掘方は掘鉢状で、平面形は歪な楕円形状となる。掘方底面が東へ偏ることからすると、西半部は掘りすぎで本来円形状に近かったとも考えられる。底面の東によった位置から最下段の井側を掘りつける。井側は結桶を使用し、部材下端部外面を斜めに削ぎ取る。下端部が不揃いの状態となっているのは、遺存状況によるものか。井側は円筒状で、平面形は著しく歪んだ円形状となっている。井戸掘方確認面の高さ標高1.2m、長さ2.4m、幅底部の高さ標高0.8m、井側上端部の径0.6m、下端は標高0.3mの位置にある。

井側内の涌水点付近から板材が重なった状態で出土した。幅は12cm前後で井側部材とも見える。片面が炭化している。井戸7からは遺物が大ボリ袋などの分量出土した。小量が井戸掘方覆土中から出土したほかは、井側内からの出土である。

井戸7出土遺物(図22・55・56、表3・4) 出土区分毎の構成は以下のようなものとなる。

[堀方] 小量。半ばが土師器細片。土師器(糸切底壺・皿、内面に墨書が残るものあり。高台碗。甕下半部)、須恵器(蓋、東播系捏鉢)。白磁(碗IV・VI類、皿II類)。青磁(龍泉窯系碗)。石製品(石鍋)。



図21 井戸7(東から)

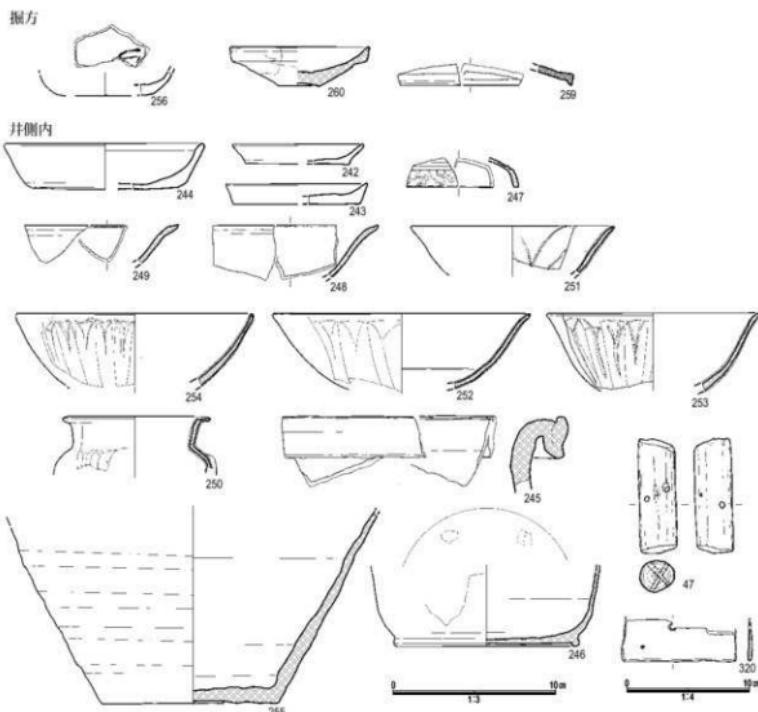


図21 井戸7出土遺物 (1:3,1:4)

[井側] 大ボリ袋。大破片を含むが、大半は細片。土師器、磁器、陶器ほぼ等量。土師器(糸切底壺・皿、やや異質なものを含む)。白磁(碗IX類、皿IX類)。青磁(龍泉窯系碗I・II・III類、広口壺)。青白磁(合子)。陶器(壺、甕)。石製品(石鍋)。鉄製品(鉄釘)。鉄滓。

図22に井戸7出土遺物を図示する。図の上段に井戸掘方出土遺物を図示する。土師器糸切底壺内底面には墨書が残る。内容不明。260は白磁皿(II2類)、須恵器蓋259は他遺物とは年代的に大きく距離を置いて古く8世紀代。

以下は、井側内出土遺物である。土師器には糸切底壺244、糸切底皿242・243がある。輸入陶磁器のうち、247は青白磁合子。白磁には皿(IX類)249、碗(IX類)248がある。龍泉窯系青磁には碗(I類)251、II類252、III類254・253)、壺250がある。陶器255は、甕底部か。盤246は、低い高台を削りだす。甕245は常滑窯陶器。

木器41は、丸木の両端を面取りし、中央付近に位置を違えて交差する方向で錐による穿孔が残る。孔辺に磨滅等は認められない。370は、板の両端を面取りし、片側の長辺付近に穿孔がある。

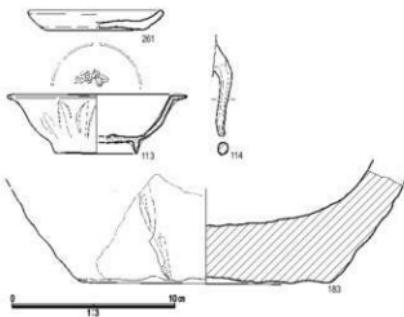


図23 井戸8出土遺物(1:3)

遺物は総量で大ボリ袋程の分量出土した。掘方覆土からの出土は小量で、大半は井側覆土からの出土である。

井戸8出土遺物 (図23・55, 表4) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

〔堀方〕 小量、細片。土師器（壺・皿、極少量）。白磁（碗）、瓦器（碗）、瓦質土器（擂鉢）、陶器（擂鉢）。

〔井側〕 大形陶器破片が顕著。 土師器（糸切底壺・皿、高台壺）。瓦質土器（擂鉢）、青磁（龍泉窯系壺皿類、陶器（盤、大甕）。石製品（石臼）。銅錢（複数枚銹着、内容不明）。金属製品（鉄釘）。鉄滓。

図23に井側内出土遺物を示す。261は糸切底皿、113は龍泉窯系青磁壺（皿類）である。瓦器114は足鍋脚部、体部への接合位置からみると京都型。鉢形の石製品183は内面が平滑で、石臼とする。遺物は、14世紀初頭までの資料を含む。

井戸9 (図16・24)

井戸5～8・9からなる井戸群の1基であり、G76-30区に位置する。井戸5・6と重複し、井戸5より古く、井戸6より新しい。東側が調査区外に広がる。掘方は擂鉢状で、掘方底面の中央に最下段の井側を設置する。井側は結桶で、部材端部を削ぎ取らない。確認面は標高1.3mで、底面は標高0.8mの位置にある。井側の上端は井戸掘方底面から高い位置まで突出した形で遺存していた。井側は円筒状で平面形は楕円形状、長径0.7mで下端部が標高0.1mの位置にある。井側の覆土は褐色砂である。

遺物は中ボリ袋程の分量出土した。掘方からは極小量が出土したほかは、大部分は井側内からの出土である。土器は細片で出土した。

井戸9出土遺物 (図25, 表4) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

〔堀方〕 極小量出土。 瓦質土器。白磁、青磁（龍泉窯系碗12類）、陶器。

〔井側〕 中ボリ袋程の分量。陶磁器が2/3を占める（大形品

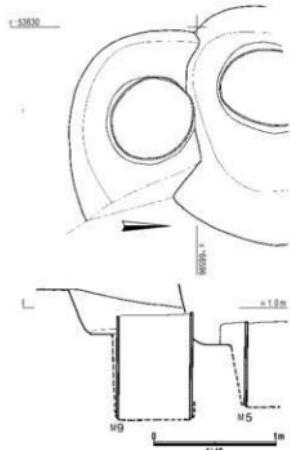


図24 井戸9(1:40)

あり)。土師器(糸切底坏・皿、甕)、青磁(龍泉窯系碗Ⅰ2・Ⅱ類、盤)、陶器(大形甕、蓋)、金属製品(鉄釘)、鉄滓、焼土(壁土若しくは竪構築材)。

図25に井側内出土遺物を示す。264は土師器糸切底坏、265は龍泉窯系青磁盤か。267は、輸入陶器大形甕(皿類)である。131は鉄製釘。

井戸10(図26・28)

調査区内の東西に群在する井戸の中間辺に独立してあり、G77-41区に位置する。掘方は播鉢状で平面形が円形状、掘方底面の中央に最下段の井側を設置する。井側は結桶で、部材下端部外面を斜めに削ぎ取る。掘方は確認面が標高1.3mにあり、径は1.3mで、今回調査した中では最も小さい。底面からの立ち上がりは急斜である。底面は標高0.7mの位置にある。井側上端は掘方底面から0.1m高い位置まで遺存する。井側は円筒状で、上端面の平面形が歪な円形状で径0.5m、下端部が標高0.3mの位置にある。

遺物は大ボリ袋程の分量出土した。

掘方から小量が出土したほかは、井側内からの出土である。大部分の土器類は細片で出土したが、一部接合可能資料がある。12世紀末頃までの資料を含む。

井戸10出土遺物(図27、表4) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

[堀方] 小量の細片資料。土師器(糸切底坏・皿、高台付大形の坏、鍋)、白磁(碗)。

[井側] 中ボリ袋程の分量、2/3が土師器(土師器坏・皿は破片に大きなものが混じる)。土師器(糸切底坏・皿、接合資料を複数含む。鍋体部極細片)、瓦器(碗、楕葉型か)、白磁(碗VI類、皿VI類)、青磁(龍泉窯系碗Ⅰ6類、同安窯系碗)、土製支脚。

図27に井側内出土遺物を示す。いずれも土師器である。272-271は糸切底坏である。120は糸切底皿である。

井戸11(図29・31)

調査区西辺部に群在する井戸の1基で、G77-41区に位置する。調査区2区と3区の境界部にあり、井戸19と重複するが、2区部分調査時に崩落して3区側の調査ができなかったことから関係を図示できない。調査時の所見では井戸11が新しい。掘方は播鉢状で、前述の事情で平面形を図示できないが、歪な円形状であったものと推測する。掘方底面の中央に最下段の井側を設置する。井側は結桶で、部材下端部は削ぎ取らない。ここでは、一段上の井側下端付近まで遺存しており、井側設置に際しては、円錐台状の井側を入れ子式に重ねていたことが判る。

井戸掘方は、確認面が標高1.2mにあり、径は2.2m前後か。涌水のため判然としないが、底面は標

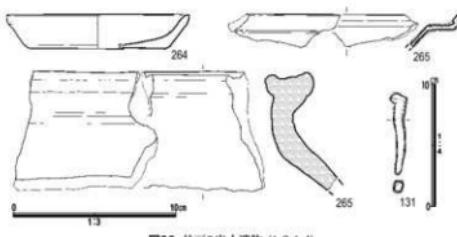


図25 井戸9出土遺物(1:3.1:4)

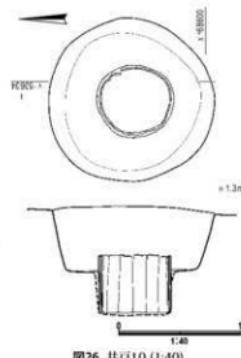


図26 井戸10(1:40)

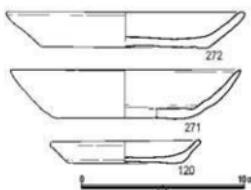


図27 井戸10出土遺物(1:3)



図28 井戸10(南東から)

高0.6mと見える。井側は僅かに円錐台状で、平面形は正な円形状を呈し、最下段井側の上端部で径0.8m、上位井側の上端部が標高0.9m、最下段井側の上端部が標高0.6m、下端部は標高-0.1mの位置にある。完存する井側部材は長さ75cm程となる。井側下端部の削ぎ取りは認められない。

遺物は大ボリ袋程の分量出土した。掘方から小量が出土したほかは、井側内からの出土である。遺物は14世紀前半までの資料を含む。

井戸11出土遺物 (図30・56、表4・5) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

[掘方] 小量、土器類は細片。土師器(糸切底环・皿)、須恵器(東播系鉢か)、瓦器(碗)、白磁(皿IX類)、青磁(龍泉窯系碗II類)、陶器、土製品(瓦玉か)。

[井側] 大ボリ袋、全形のわかる資料が混じる。土師器環・皿類が2/3を占める。土師器(糸切底环・皿)、須恵器(東播系捏鉢)、瓦器(碗)、白磁(碗V・皿類、皿皿類)、陶器、石製品(砥石)、金属製品(鉄釘)、木製品、瓦(平瓦)、鉄滓。

図30に井戸11出土遺物を図示する。井戸掘方出土遺物

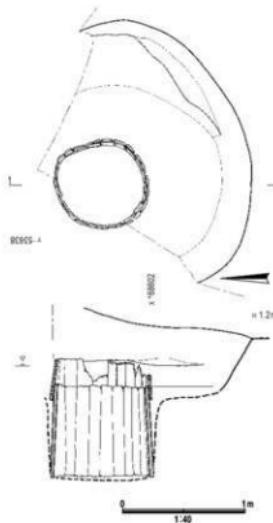


図28 井戸11(1:40)

287は、須恵質の土器片の四周を打ち欠いて瓦玉としたものである。以下はすべて井側内からの出土である。116・117・286・285は土師器系切底坏、118・275・277・276は土師器系切底皿である。土師器坏の口縁径は12cm 強辺にあり、土師器皿の口縁径は8cm 辺にある。319は丸木材の両端を球面状に面取りし、不整な球状に整形したものである。片側を欠く。184は板状の砥石である。両面に砥面が残る。図示しないが平瓦は厚く、凹面を焼し、凸面には長軸方向の条線（沈線）が残る。

井戸12（図32・34）

調査区西辺部に群在する井戸の1基で、76-40区に位置する。井戸15と重複しそれよりも新し

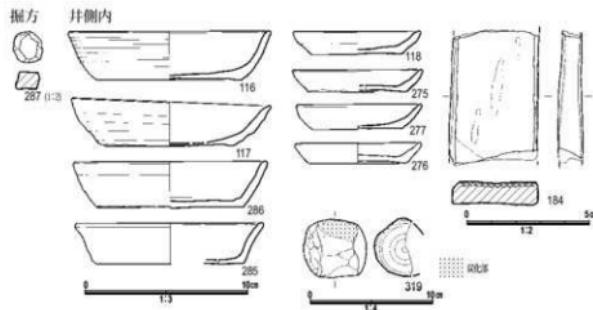


図30 井戸11出土遺物(1:2, 1:3, 1:4)



図31 井戸11（北東から）

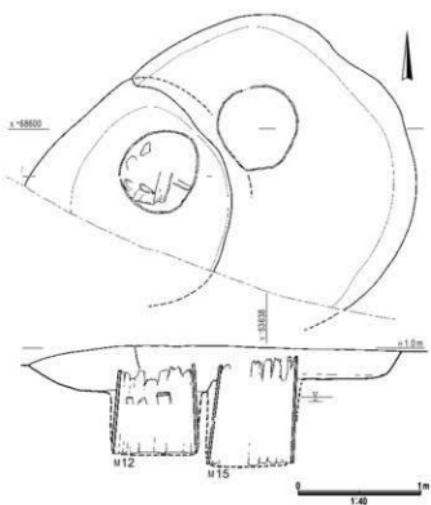


図32 井戸12-15(1:40)

い。掘方は擂鉢状。試掘溝で一部掘り下げているが、平面形は歪な楕円形状であったものと推測する。掘方底面の北へ寄った位置に最下段の井側を設置する。井側は結桶で、部材下端部外面を斜めに削ぎ取る。井戸掘方は、確認面が標高 1.0 m にあり、復原可能な短径位置で幅 1.8 m。底面は標高 0.6 m の位置にある。最下段井側は僅かに円錐台状で、平面形は歪な円形形状を呈し、上端部で径 0.7 m、下端部は標高 0.1 m の位置にある。井戸掘方の南部分に黒褐色泥土(粘土)の集中がみられる。標高 0.5 m 迂から涌水がある。涌水面付近から井側部材と思われる板材が斜めに落ち込んだような状態で出土した。井側内の南西部に偏って黒褐色泥混じりの砂層が分布し、この位置からの出土遺物が多い。



図33 井戸12-15(北から)

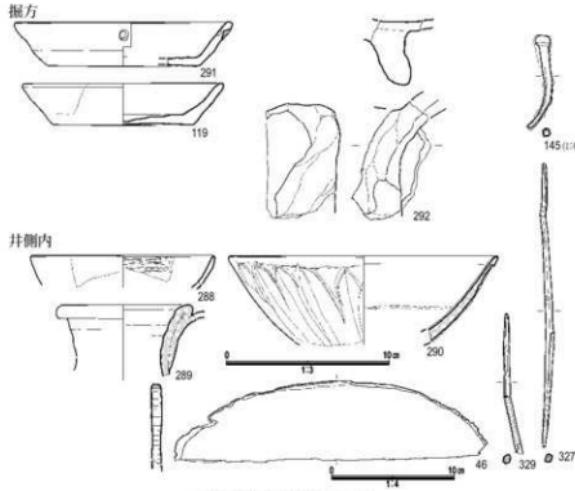


図34 井戸12出土遺物 (1:3,1:4)

遺物は総量で大ボリ袋程の分量出土した。掘方から小量が出土したほかは、井側内からの出土である。遺物は13世紀後半若しくは14世紀前半までの資料を含む。

井戸12出土遺物 (図33・5・56、表5) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

[堀方] 小量、細片。土師器(糸切底壺・皿、高台壺)、瓦器、白磁(碗、瓶)、青磁(龍泉窯系碗Ⅰ3類)、陶器(碗、盤、甕)、土製品(礪か)。

[井側] 中ボリ袋程の分量、細片、半ばが陶器(大形器形)。土師器(糸切底壺・皿)、瓦器(碗)、白磁(水注)、青磁(龍泉窯系碗Ⅱ類)、陶器(盤)、金属製品(釘)、焼土(壁土か)。

図33上段に井戸12掘方出土遺物を示す。291・119は土師器糸切底壺である。291の口縁近くには内外面から対向して穿孔が行われている。穿孔は回転工具により行われているが、やや位置がずれていて、貫通していない。292は土製礪焚口部か、底下面、内面に煤状の付着物が顕著である。145は鉄製釘である。図下段に井側出土遺物を示す。288は瓦器碗、289は白磁壺(皿類)である。

遺構14 (図3-5)

調査区中央を帶状に西北西方向に広がる遺構分布とは離れて南側、G76-50区に位置する。東に広く基礎除去に伴う撹乱があり、北側の遺構群との間の遺構分布は不明である。撹乱部は深く、涌水があったことから遺構確認はできなかった。遺構14の確認面は標高0.7mの位置である。平面円形の遺構で、覆土は黒褐色砂。一段下げた位置から涌水があり、水中ポンプで排水しながら標高0.4mの位置まで掘り下げたところで全体が崩壊した。掘り下げ中、涌水面の深さで矢板状の板列を検出した。板列はまっすぐ配列しており、井側の桶とは異なっているように観察された。抜きあげた板材も、井戸の井側部材とは幅が大きく異なる材が組み合

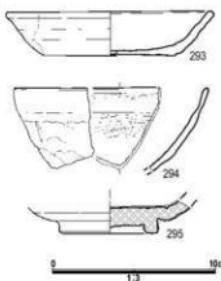


図35 井戸14出土遺物 (1:3)

わされている。

掘り下げ中、覆土から小量の遺物が出土した。遺物は13世紀後半までの資料を含む。

遺構14出土遺物 (図35、表5) 遺物構成は以下の通り。土師器(糸切底坏・皿、鍋か)、瓦器(碗)、青磁(龍泉窯系碗I類)、鉄滓。

図35に遺構14出土遺物を示す。293は土師器糸切底坏、294は瓦器碗、295は龍泉窯系青磁碗(I類)である。

井戸15 (図32・34)

調査区西辺部に群在する井戸の1基で、76-40区に位置する。井戸12と重複し、それより古い。掘方は擂鉢状。試掘溝で一部掘り下げているが、平面形は歪な橢円形状であったものと推測する。掘方底面の北へ寄った位置に最下段の井側を設置する。井側は結桶で、部材下端部外面は削ぎ取らない。井戸掘方は、確認面が標高1.0mあり、復原可能な長軸位置で長さ2.5m。底面は標高0.8mの位置にある。井側は歪んだ円筒状で、平面形は歪な円形状を呈し、上端部で径0.7m、下端部は標高0.0mの位置にある。井側覆土はやや汚れた印象の暗黄褐色砂である。

遺物は総量で大ボリ袋程の分量出土した。井戸掘方、井側内とも小量ずつ出土し、加えて井側内からは木製品の出土があった。遺物は14世紀前半までの資料を含む。

井戸15出土遺物 (図36・56、表5・6) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

(堀方) 小量。土師器(糸切底坏・皿)、須恵器(壺、小形壺、東播系捏鉢)、白磁(碗IV類、碗VI類か)、陶器、金属製品(鉄釘)。

(井側) 小量。土師器(糸切底坏・皿、高台坏、鍋か)、白磁(碗V類)、青磁(龍泉窯系碗I・II類)、鉄滓。

図36上段左に掘方出土遺物を図示する。298は須恵器。壺口縁部として図示するが、脚の可能性がある。外面の平坦面の一部、屈曲部に薄く軸状の付着物が残る。296は土師器鍋とみて図示するが、竈焚口部の底部の可能性がある。

図右、下段左に井側内出土遺物を図示する。299は瓦器碗。木製品45は一端を欠く。板材の中央片側に寄った位置に穿孔している。44は下駄である。刃は別造りで柄により結合し、木製の板釘により固定したものか。足指のある位置に磨滅が見え、それからすると左足用か。

掘方

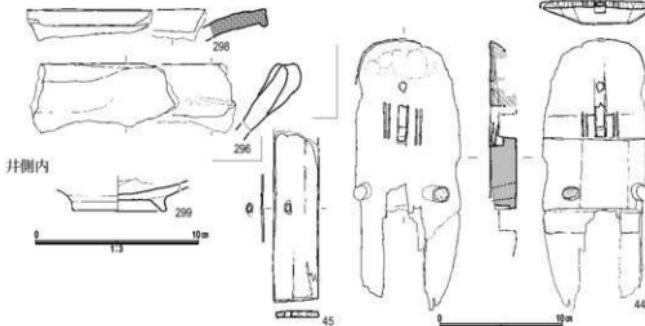


図36 井戸15出土遺物 (1:3.1:4)

土壤 16 (図 37・39)

調査区中央を帶状に西北西方向に広がる遺構分布から北に離れて、調査区北辺、G77-42 区に位置する。遺構の北部分は調査区外に伸びる。調査した範囲では、平面形が隅円長方形と推測される。断面形は逆台形状を呈する。確認面は標高 1.2 m の位置である。調査範囲で長さ 1.0 m、幅 1.1 m、底面は標高 0.7 m の位置にあり、深さは 0.5 m ほどの規模となる。壁面は急斜に立ち上がり、掘削後程なくして埋め立てられたものか。覆土も暗褐色で全体に一様な砂であり、雨水等の影響がない状態で埋没したことが推測できる。遺物は覆土中から散漫に小量出土した。

土壤 16 出土遺物 (図 38、表 6) 土師器坏・皿の極細片のほかに図 38 に示す大和型瓦器碗細片 (194) が出土した。口縁部外面が外反し、口唇直下の内面に段状の沈線を施す。

土壤 17 (図 40・42)

調査区西辺部、群在する井戸群に混じって、G77-41 区に位置する。調査区 3 区西壁に掛かり拡張区の調査で残る西部分



図37 土壌16 (1:40)

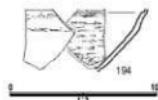


図38 土壌16出土遺物 (1:3)



図39 土壌16 (南西から)

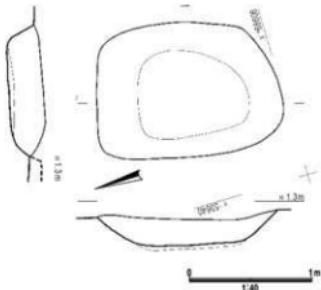


図40 井戸17(1:40)

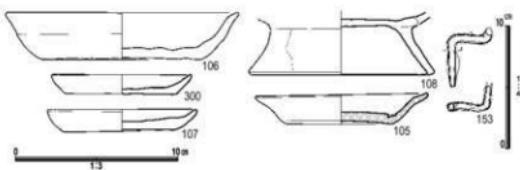


図41 井戸17出土遺物(1:3, 1:4)



図42 土壌17(北東から)

掘方は、確認面が標高 1.1m の位置にあり、径 2.1 m。底面は標高 0.8 m の位置にある。井側は円筒状で、平面形は歪な円形状を呈し、上端部で径 0.7 m、下端部は標高 0.2 m の位置にある。井側内は、黒褐色で粘土を多く含む砂～シルトで埋まる。

遺物は総量で大ボリ袋程の分量出土した。井戸掘方、井側内とも小量ずつ出土した。13世紀後半代までの資料を含む。

まで完掘した。平面形は歪な隅円方形で、断面形は低い台形状となる。遺構確認面は標高 1.2 m の位置である。長さ 1.5 m、幅 1.1 m、底面は標高 0.9 m の位置にあり、深さは 0.3 m の規模となる。覆土は粘土混じりの砂で、暗褐色粘土塊が混じり、固く締まる。埋め立て等によるものである可能性がある。

遺物は完形の土器を含み、大ボリ袋程の分量があるが、調査中井戸 20 出土遺物を取り違えて記録した可能性があり、本来はより小量であったものと推測する。

遺物は、14世紀初までの資料を含む。

土壤 17 出土遺物 (図 41・56, 表 6) 遺物構成は以下のようなものとなる。

土師器(糸切底坏・皿、高台坏、竈か)、須恵器(大形甕)、白磁(皿 IX類)、青磁(龍泉窯系碗 II類)、陶器(捏鉢、壺)、金属製品(鉄釘)、鉄滓

図 41 に土壤 17 出土遺物を図示する。土師器には糸切底坏 106、糸切底皿 300・107 の他、坏高台部破片 108 がある。105 は白磁皿(IX 1b 類)、153 は一端を欠くが、2箇所で鉤形に屈曲する金具である。

井戸 18 (図 43・45)

調査区西辺部に群在する井戸の 1 基で、77-41 区に位置する。掘方は擂鉢状で、平面形は歪な円形状である。掘方底面中央に最下段の井側を設置する。井側は結桶で、部材下端部は削ぎ取らない。井戸



図43 井戸18・19・20(南から)

井戸18出土遺物(図44、表6) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

〔堀方〕小量、土器類は細片、顯著に磨滅。土師器(壺・皿類か、極細片化して顯著に磨滅。鍋か、把手部で、原形を推測できない)、須恵器(東播系捏鉢)、瓦器、白磁、陶器。

〔井側〕小量、土器細片。土師器(糸切底壺・皿)、須恵器(東播系捏鉢)、瓦器(碗)、青磁(龍泉窯系碗I・II類)、石製品(大形石錘)、金属製品(鉄釘)、瓦(丸瓦)、焼土(壁土か)。自然遺物(魚骨)。

図44上段右に井側内出土遺物を示す。304は東播系須恵器捏鉢である。303は口縁部の細片で、蛸壺とする。

図上段右、下段に井側内出土遺物を示す。161は鉄製釘である。69は大形礫の両長辺中央部を打ち欠き、整形した礫石錘である。

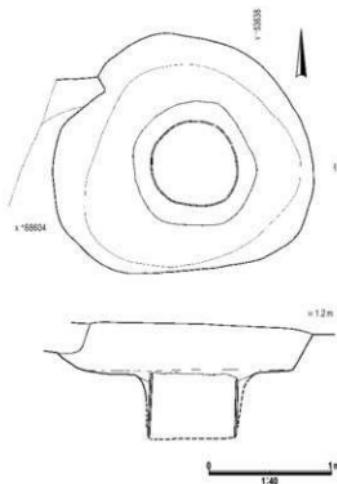
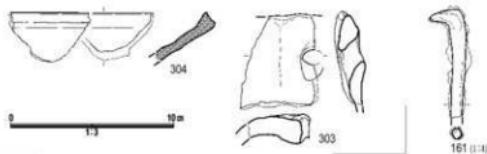


図44 井戸18(1:40)

掘方



井側内

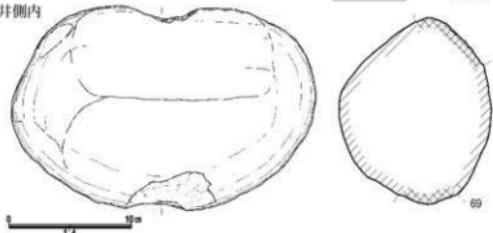


図45 井戸18出土遺物 (1:3, 1:4)

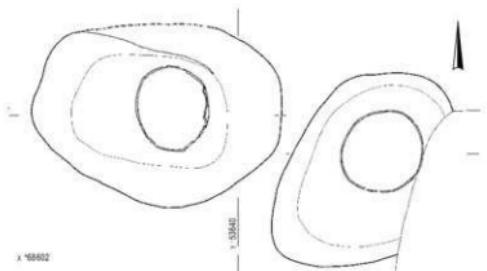


図46 井戸19・20 (1:40)

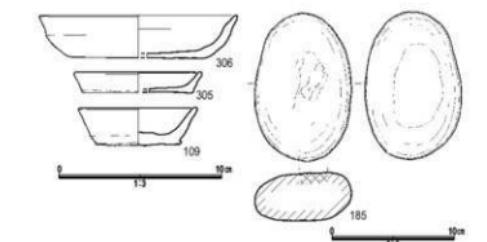


図47 井戸19出土遺物 (1:3, 1:4)

井戸 19 (図 45・46)

調査区西辺部に群在する井戸の1基で、77-41区に位置する。井戸 11 の項で記したような事情で図示できないが、調査時の所見では井戸 19 が古い。掘方は壠鉢状で、平面形は歪な楕円形状である。掘方底面北側に寄って最下段の井側を設置する。井側は結桶である。井戸掘方は、確認面が標高 1.0m の位置にあり、長さ 1.9 m。底面は標高 0.6 m の位置にある。井側は円筒状で、平面形は歪な楕円形状を呈し、上端部で長さ 0.7 m、下端部は標高 0.3 m の位置にある。井側内は褐色粘土混じり砂の薄層で埋まる。

遺物は井戸掘方、井側内から出土した。ともに小量で、総量も中ボリ袋程の分量であるが、完存資料を含む。遺物は 14 世紀半ば頃までの資料を含む。

井戸 19 出土遺物 (図 47・56、表 6) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

(堀方) 小量、細片が主。土師器(坏)、白磁(碗V・VII類)、青磁(龍泉窯系碗II類)、陶器。石製品(敲石)。鉄滓。

(井側) 小量、完存～細片。土師器(糸切底坏・皿、小形坏)、青磁(龍泉窯系碗II類)。

なる。

図 47 に図示するものはすべて井側内出土遺物である。土師器には糸切底坏 306、糸切底皿 306・109 がある。皿 109 は完存で、口縁部径に比して器高が目立って高い。185

は、敲石とする。円碟の片面中央部中心に敲打痕が集中する。

井戸 20 (図 45・46・52)

調査区西辺部に群在する井戸の1基で、77-41区に位置する。掘方は擂鉢状で、平面形は歪な橢円形状である。掘方底面東側に寄って最下段の井側を設置する。井側は結桶で、部材下端部外面を斜めに削ぎ取る。下端部まで遺存不良。井戸掘方は、確認面が標高1.0mの位置にあり、長さ2.0m。底面は標高0.7mの位置にある。井側は僅かに円錐台状で、平面形は歪な橢円形状を呈し、上端部で長さ0.7m、下端部は標高0.3mの位置にある。遺物は掘方、井側から出土し、総量で大ボリ袋程の分量となった。ただし、掘方出土遺物に現場取上げ時の取り違えがあり、土壤17の遺物に対して混入、若しくは土壤17遺物からの混入がある可能性大である。ここでは井戸20掘方出土遺物が土壤17出土遺物に一部混入したものとして取り扱っておく。遺物は、前述の不確定要素を含むが、14世紀前半までの資料を含む。

井戸 20 出土遺物 (図 48-56, 表 6-7) 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

〔堀方〕 小ボリ袋、接合資料を含む。 土師器(糸切底坏・皿、鍋か)、須恵器(東播系捏鉢)、白磁(碗V類、皿IX類)、青磁(龍泉窯系碗II類)、焼土(壁土か)。

〔井側〕 大ボリ袋、破片。 土師器(糸切底坏・皿)、須恵器(東播系捏鉢)、瓦質土器(壺)、白磁(碗IX類、皿IX類)、陶器(碗ほか)、焼土(壁土か)。

図48上段に井戸20掘方出土遺物を示す。土師器174・175・112は糸切底皿である。173は龍泉窯系青磁碗(II類)である。一部ではあるが、底部から口縁部まで連続した形を残す資料である。上述したような事情で174・175・173は土壤17出土であった可能性を残している。

図48下段に井戸20井側内出土遺物を示す。土師器は、糸切底坏307・308・309、糸切皿309がある。111の底面には細かな条線が残されている。110は東播系須恵器捏鉢である。310は瓦質土器壺である。

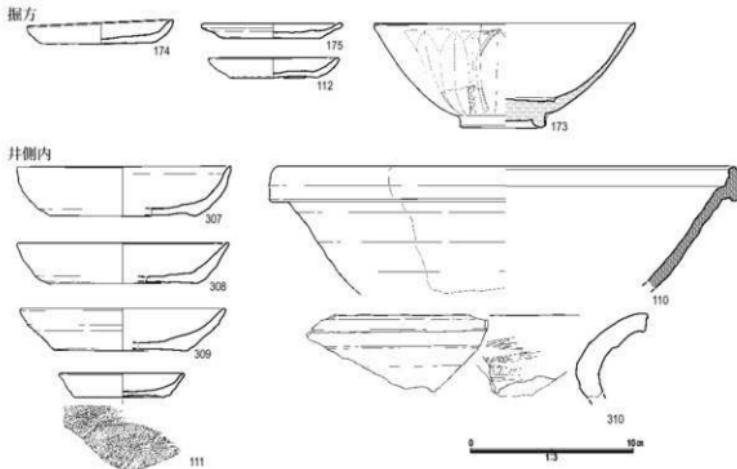


図48 井戸20出土遺物 (1:3)

溝 21 (図 3・6)

調査区西辺部に群在する遺構から北へ離れて G77-41 区で検出した。調査区内井戸群と平行し、現況町筋とも平行して、西北西方向へ向かって伸びる溝である。確認範囲は調査区西辺寄りの位置のみであり、かつ底部が断片的に遺存していたに過ぎない。覆土は粘土混じりの砂で固くしまっている。一度掘り上げた土壤が、再堆積したもののように見える。近來の工事に伴ったものであるとの疑を捨てることができない。遺物は覆土中から極小量が細片で出土した。

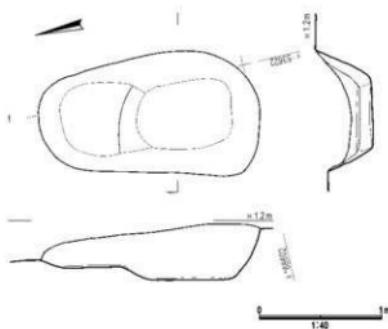


図49 井戸19-22 (1:40)

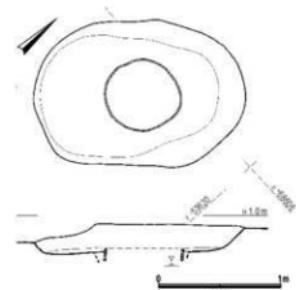


図50 井戸23 (1:40)

(井側) 細片 (一部溝 21 出土遺物が混じる)。土師器 (糸切底坏・皿、脚付坏)、須恵器 (束縛系捏鉢)、青磁 (龍泉窯系碗 II 類)。焼土 (壁土か)。

採集及び地山出土遺物 (図 51, 表 7)

調査 1 区では、井戸 3 に接して地山層から遺物の出土があった。G76-3042 区で、炭混じり砂層が小範囲に分布し、極小量の土器が出土した。図示できる 195 は瓦器皿である。

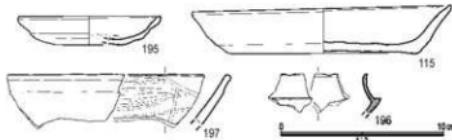


図51 地山出土・採集遺物 (1:3)

土壤 22 (図 49・52・53) 調査区北辺、G77-51 区に位置する。長軸を南北方向に取る歪な椭円形の土壤である。北側が一段低い。確認面の標高 1.2 m、長さ 1.0 m、底面の低い面は標高 0.7 m の位置にあり、その位置で深さ 0.5 m となる。遺物は覆土中から散漫に出土した。極小量の細片化した土器類で、土師器坏・皿の他に白磁がある。

井戸 23 (図 50・54)

調査区西辺部に群在する井戸の 1 基で、77-51 区内調査区では最西端に位置する井戸である。掘方は極く残るが、桶鉢状、平面形は歪な椭円形状である。掘方底面中央付近に最下段の井側を設置する。井側は結桶である。掘り下げ途中に涌水により崩落し涌水部以下の詳細不明。井戸掘方は、確認面が標高 1.0 m の位置にあり、長さ 2.0 m。底面は標高 0.7 m の位置にある。井側は結桶で、上部の平面形は歪な円形形状を呈し、長さ 0.7 m である。下部の状況は崩落のため不明。遺物は掘方、井側から少量出土した。13 世紀前半までの資料を含む。

井戸 23 出土遺物 出土部位ごとの遺物構成は以下のようなものとなる。

〔掘方〕 小量、細片。土師器 (坏・皿、高台碗)、瓦器、白磁 (皿)。

他に、遺構確認時、擾乱掘削時に遺物の出土があった。115 は土師器糸切底坏、197 は瓦器腕、196 は古墳時代後期須恵器坏身である。



図52 3号拡張部遺構(北から)



図53 上段 22(西から)



図54 井戸 23(西から)

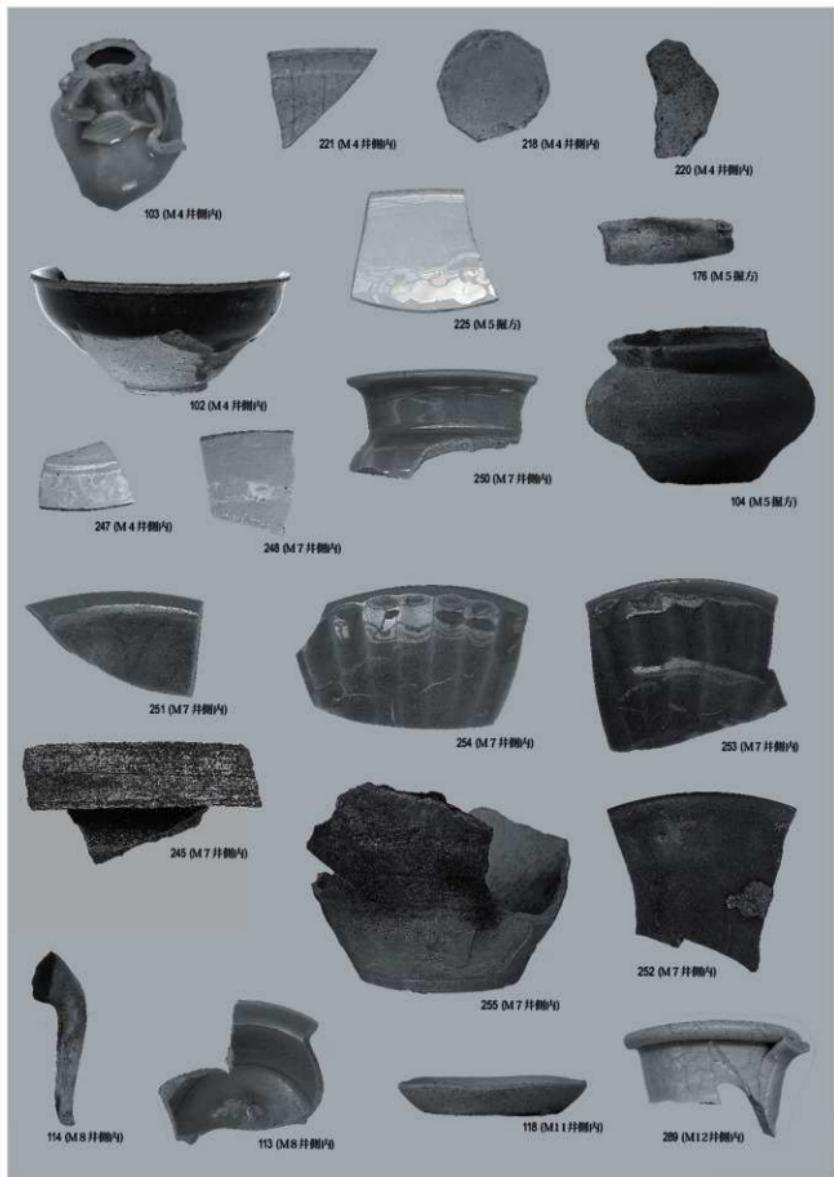


圖55 箱崎76次調查出土遺物(1)



图56 翁岭76次调查出土遗物(1)

3 おわりに

箱崎 76 次調査では、箱崎遺跡の西縁に近い砂丘西面緩斜面について調査を行った。周辺調査区と異なり、既存構築物により遺跡上部が破壊された後の調査であり、地山である砂丘を削平した位置からの遺構検出となった。このため、確認できた遺構は井戸及び一部の土壌等にとどまった。検出した井戸は 16 基で、土壌 2 基その他に溝・性格不明の遺構各 1 基である。箱崎 67 次地点と同様地山砂層の極限られた範囲から遺物が出土したほかは、周辺調査区に分布していたような包含層は完全に削平されていた。遺構の年代は、13 世紀ないし 14 世紀前半までの遺物が出土するものが殆どである。土師器については窓切り底の資料を確認することができなかった。極小量であるが、古墳時代までの土器が出土している。

今回調査した井戸は、すべて井側に結桶を用い、すべて掘鉢状の掘方底面から井側最下段を設置するものである。調査時、井戸掘方直下に地下水位があり、水中ポンプでの排水が必要な程の量の出水があった。調査時には、すべての井戸について水と共に地山砂層の砂が流入、地山層とともに井側も崩落して、完全な形で掘りあげることができなかった。この現況から井戸掘削時の状況を考えてみると、当時も出水下での工事であったはずで、掘方掘削後据えつけるというような工法は、不可能であろう。また、調査例では、しばしば掘方が井側に接する規模であったとされことが多い。このことから、井戸掘方底面に据えた井側の内部の地山砂層を掘削排出し、井側により土留めをしながら、掘削分井側を押し込む作業を繰り返し、所定の深さまで下げたのではないかと想像される。それゆえ、最下段井側のための掘方は井側規模よりさほど大きなものとはならなかったのではないかと思像される。今回調査では、いくつかの井側では、部材下端部外面を斜めに削ぎ取っていた。これも、井側を押し下げる際の機能を意識したものとも考えることができる。

調査区内では東南東から西北西に向かって帶状に分布する。一部は重複し、4 基が重複するものもある。中には古い井側を残した状態で井戸掘方が掘削され、結果として 2 基の井側を共有するような井戸掘方も見られる。

井戸の分布は現町割りに沿うような方向を取り、東に隣接する箱崎 64 次地点にもその分布が続くようである。更に、箱崎 64 次地点の南西に続く箱崎 67 次地点では今述べた井戸の分布と直交するように分布する井戸が検出されている。周辺地域では、あるいは町家の様な区画と密度の高い土地利用が行われていたものかもしれない。

報告遺物観察表について

本表は、今回報告遺物の個々について記述する（表 1～7）。
遺物は、報告掲載毎に、遺物番号順に掲載した。項目は以下の通りである。

- 1) 図 報告図番号
- 2) 遺物番号 登録遺物番号とする。
- 3) 遺物種別 遺物分類（種別／器種／細分）、年代。
- 3) 出土位置 調査区・遺構・部位。
- 3) 遺物記述 以下の項目について、順に記述した。項目は、「〔 〕」で示した。
 a. 材質（胎土・焼成） 胎土は断面観察を行った。焼成については遺存環境に依ることが大きいため、特別な例以外は記述していない。色調は必要に応じて断面も記述した。石器類、木器類等は素材についても記述した。
 b. 成形・調整 製作技術上の観察を記した。
 c. 特記 項目立てた以外の事項について記した。
 g. 遺存状況 遺存する分量、部位のほか、器表の状態について記した。統計で、計測を行ったものについては、その計測部位と精度、計測値を記した。別に、遺物番号順の図索引を付した（表 8）。

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺 物 記 述
9	192	土師器 瓢 丸底	I区M1	[材質(船土・焼成)] 前土: やや粒状性。粗砂を小量含む。器表: 内外面とも淡黃褐色(10YR 8/3)。 [成形・調整] 押し出し技法による成形。内面: 鏡磨き調整により平滑な球面を形成。外面: 回転を利用した撫で調整・凸部に鏡磨き調整。まばらな斜め方向の鏡磨き調整。凸部に鏡磨き調整が残る。／ [特記] 体部中程の内外面に薄く黒褐色付着物。／ [遺存状況] 口縁部破片
11	193	土師器 盆	I区M2 井側内(近鉢)	[材質(船土・焼成)] 前土: やや粒状性あり、均質。褐色細粒を含む。内外面とも、にぶい褐色(7, 6YR 7/3)。 [成形・調整] 底部系切り離し。内外面とも頗る單位の撫で調整。／ [遺存状況] 口縁部小破片 口縁部径(復原)7.1cm、底部径(復原)5.8cm、器高1.1cm
14	14	銅錢「天聖元寶」(初 鑄1023(北宋))	I区M3 井側内(近鉢)	[遺存状況] 完存
14	126	鉄器 刃	I区M3 井戸 掘方	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂、成形。細孔を多数生じる。断面: 淡黄色(2, 5Y 8/3)を呈す。 [形状・組織] 先端部大、長(現状)8.1cm
14	200	天日袖陶器 瓢	I区M3 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂、細孔を多数生じる。断面: 淡黄色(2, 5Y 8/3)を呈す。 [形状・組織] 内外面に均一に撫で。黒色、不透明。表面に流理状の凹凸を残し、にぶいガラス光沢を呈す。口唇部では薄く、にぶい赤褐色(5YR 4/3)を呈す。内外面の底面下では、木灰状に褐色(7, 10Y 4/3)が分布する。／ [成形・調整] 口縁部は、一端内方に屈曲した後立ち上がり。／ [遺存状況] 口縁部小破片 厚さ5cm
14	201	陶器 瓢	I区M3 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂、それに纖維を含む。断面: 淡褐色(5YR 5/2)。 [形状・組織] 外面から口縁部の内面まで薄く掛かる。黒色、不透明。細孔状光沢を呈す。／ [成形・調整] 口縁部は外方に折り返し、丸く整形。内外面に周回方向の撫で調整。／ [遺存状況] 口縁部1/2の破片 口縁部径(復原)11.1cm
14	202	越州窑青磁 盆	I区M3 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 細密で小量粗砂を含む。細孔を生じる。断面ではにぶい黄褐色(10YR 7/4)を呈す。表面は前面から外面部付近まで掛かる。頭部に発泡して光沢の無い淡白色を呈す。被熱によるものと見える。／ [成形・調整] 高台を削りだす。内底面と対応する高台部分に開口を開けて目立がる。／ [特記] 被熱する。／ [遺存状況] 底部小破片 高台部径(復原)8.3cm
14	203	瓦質土器 瓢体	I区M3 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 基質は灰白色、粗砂(花崗岩起源)を含む。器表: 暗灰色(5Y 8/1)。 [形状・組織] 前土: 純白、成形。細孔、／ [成形・調整] 外面: 縦方向、不偏の刷毛目調整。口縁部に周回方向の撫で調整。部体部分の押さえ、背面: 周回方向、細めの刷毛目調整。一口縁から瓶方向の幅、間隔を大きく開ける。
14	204	瓦質土器 水鉢	I区M3 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂を含み、断面: 扇形状。器表: 淡黄褐色(10Y 6/2)。既ににぶい褐色(5Y 6/2)。泥、やや軟質。 [形状・組織] 各部: 鏡磨き調整により平滑な表面を形成。外表面にも鏡磨き調整。内面: 周回方向の撫で調整、内底面に及ぶ、底部に近いに鏡形の印化紋。／ [遺存状況] 底部: 小破片 底部径(復原)13.6cm
14	205	土師器 盆	I区M3 井戸 掘方	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂を含む。細孔を多数生じる。器表: にぶい黄褐色(10Y 7/4)。 [成形・調整] 施釉部内面周回方向の撫で調整。／ [特記] 高い高台。／ [遺存状況] 底部: 高台部 瓶高(復原)10.1cm
14	208	白磁 瓢 X型か	I区M3 井戸 掘方	[材質(船土・焼成)] 前土: 均質、細孔を生じる。断面: 淡灰白色。 [形状・組織] 軸: 内外面に施釉、透明で、内面に寅入を生じる。ガラス状光沢を呈す。施釉部の器表灰白色(10Y 8/4)。 [成形・調整] 口縁部細孔、内面側は施釉前に釉を書きり、面を生じる。外面に器表に墨に区画するような細かな模様を施す。／ [遺存状況] 口縁部細孔 厚(体部)0.5cm
14	211	越州窑青磁 小碗	I区M3 井戸 掘方	[材質(船土・焼成)] 前土: 細孔を生じる。断面: 淡灰白色(7, 5YR 8/4)。 [形状・組織] 軸: 内外面に薄く無施釉するが、わらが頭を呈し、流して溜まる部分では不規しく発泡してあたたか感を呈す。施釉部の器表ににぶい黄色(2, 5Y 6/3)。 [成形・調整] 外面に周回方向の条線が残る。内面平滑。／ [遺存状況] 口縁部細孔
14	213	陶器 瓢 E1c類	I区M3 井戸 掘方	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂を大量に含む。細孔を頭部に生じる。断面: 淡灰褐色(10YR 5/2)。 [形状・組織] 施釉しない。外: 赤褐色(5YR 5/2)、内面: 淡黄褐色(10YR 6/2)。／ [成形・調整] 内面側で調整。口縁部内面膨隆部削除、3段の隠起対形成で模様部撫で調整。器表を側撫で調整。／ [遺存状況] 口縁部細孔 厚(体部)0.5cm
14	234	土師器 盆	I区M3 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 細密。粗砂を小量含む。器表: 内外面ともににぶい褐色(5YR 7/4)。 [形状・組織] 底部系切り離し。内外面とも回転を利用した撫で調整。／ [遺存状況] 小破片 口縁部径(復原)11.0cm、底部径5.7cm、器高3.1cm
15	101	白磁 盆 四脚 (13C後半~14C前半)	I区M4 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 均質、細孔を生じる。断面: 白色。輪は全面に施釉後、口縁部は、面を取るよう握り取る。外底面は無施釉。輪上面に残る。器表: 施釉状態を呈し、にぶい樹脂状光沢を呈す。輪上面は底面に沿い、赤褐色(5YR 5/2)。内面: 淡黄褐色(10YR 6/2)。 [形状・組織] 内底面で調整。口縁部内面膨隆部削除、周回方向の施釉部取りにより、面を成す。／ [遺存状況] 1/4周遭存、底部完存。口縁部径(復原)11.0cm、底部径5.7cm、器高3.1cm
15	102	天日袖磁器 瓢	I区M4 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: やや粒状性あり、孔隙を生じる。断面: 白色。輪は全面に施釉後、口縁部は、面を取るよう握り取る。外底面は無施釉。輪上面に残る。器表: 施釉状態を呈す。輪上面は底面に沿い、赤褐色(5YR 5/2)。内面: 淡黄褐色(10YR 6/2)。 [形状・組織] 輪上面で調整。輪上面は底面に沿い、赤褐色(5YR 5/2)。内面: 淡黄褐色(10YR 6/2)。輪上面は底面に沿い、青みのかかった赤褐色(7, 5YR 2/1)。口縁部は褐色(7, 5YR 4/3)を呈す。内面には赤目状の変化が見られる。／ [成形・調整] 施釉部の下半外面では、回転削り、底部を斜めに削り込んで低い高台を形成、高台内は軽く削り込む。／ [遺存状況] 口縁部径(復原)12.3cm、底部径(復原)5.7cm、器高5.0cm
15	103	青白磁 瓶	I区M4 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 細密。細孔が孔隙を生じる。断面: 淡灰白色。輪: 外面に均一に握る。輪上面は底面に沿い、濃色となる。輪は発泡するが透明。ガラス状光沢を呈す。施釉部はやや青みのかかった赤褐色(7, 5YR 2/1)。口縁部は褐色(7, 5YR 4/3)を呈す。内面には赤目状の変化が見られる。／ [成形・調整] 施釉部の下半外面では、回転削り、底部を斜めに削り込んで低い高台を形成、高台内は軽く削り込む。／ [遺存状況] 口縁部径(復原)12.3cm、底部径(復原)5.7cm、器高5.0cm
15	127	鉄器 刀	I区M4 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂。／ [特記] 基礎側が折れ曲がるが、跡の進行後、調査時の横傷か、接合しないが、R128と同一個体か。／ [遺存状況] 基礎側を大きく、鈍くもしく進行するが、芯部に金属が残る。長(現状)29.0cm、身幅3.1cm
15	214	土師器 盆	I区M4 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: 粗砂を含む。器表: 淡灰白色(2, 5Y 8/3)。／ [成形・調整] 底部系切り離し。／ [遺存状況] 口縁部(復原)18.0cm、底部径(復原)5.5cm、器高1.0cm
15	215	土師器 耳皿	I区M4 井側内	[材質(船土・焼成)] 前土: やや粒状性あり、粗砂を含む。器表: にぶい褐色(7, 6YR 7/4)。 [形状・組織] 底部系切り離し。耳部は、折り込み部を環状の工具で切り込みをする。／ [遺存状況] 小破片 口縁部径(復原)8.7cm、底部径6.9cm、器高1.0cm

表2 報告遺物観察表

33

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物 記述
15	216	土器器 环	IJKM4 井側 内	[材質(船士・施成)] 船士: 相砂・褐色粒子を含む。縫孔を生じる。器表: にぶい橙色 [7.5Y 7/4]。／ [成形・調整] 施部系切り離し。内外面とも周回方向に断続する撫で調整。 [遺存状況] 小破片 口縁部径(復原)11.4cm、底部径(復原)9.6cm、器高2.6cm
15	217	土器器 环	IJKM4 井側 内	[材質(船士・施成)] 船士: 褐色粒子のほか小量の粗砂(小振り)を含む。器表: にぶい橙色 [7.5Y 7/4]。／ [成形・調整] 底部希少に離す。内外面、無い底面周回方向に断続する撫で調整。 [遺存状況] 小破片 口縁部径(復原)12.5cm、底部径(復原)10.2cm、器高2.2cm
15	218	土器器 (吉備系) 粗	IJKM4 井側 内	[材質(船士・施成)] 船士: 相砂を含む。断面形状: 器表: にぶい黄褐色 [10W 7/2]。／ [成形・調整] 底部希少に離す。内外面、無い底面周回方向に断続する撫で調整。 [遺存状況] 小破片 口縁部径(復原)12.5cm、底部径(復原)10.2cm、器高2.2cm
15	219	東播系須恵器 捺鉢	IJKM4 井側 内	[材質(船士・施成)] 船士: 相砂を含む。断面形状: 器表: にぶい黄褐色 [10W 7/2]。／ [成形・調整] 施部系切り離す。内外面、無い底面周回方向に断続する撫で調整。 [特記] 被熱か、器表、施部赤化。 [遺存状況] 口縁部細片
15	220	土器器 器種不詳	IJKM4 井側 内	[成形・調整] 板状の粘土の一端に貼付した粘土が突起状に残る。同面に布压底板。 [特記] 細片であり。全体の形狀、資料の部位不詳。／ [遺存状況] 部位不明の細片。器表やや荒れ、厚0.6cm
15	221	白磁 瓶 V4c類 (12c後半)	IJKM4 井側 内	[材質(船士・施成)] 船士: 縫孔を多数生じる。断面灰白色 [2.5y 8/1]。種: 内外面に薄く掛かる。発見して半透明。にぶい断面光沢もみる。施部の器表灰白色 [7.5E 8/2]。／ [成形・調整] 口縁部の外側回転削り。口縁部は反。口縁ややくった位置に両側から削り残しして口縁に突起。一隅隔を開けて最口細い刻線。 [遺存状況] 口縁部細片。厚(体部)0.3cm
18	27	曲物 容器(側板)	IJKM5 井側 内	[材質(船士・施成)] 材質: 釧彌唐(スギハ)、薄い底板。／ [成形・調整] 接合部、素材板の重ね合わせ部の2箇所を、樹脂帶で締じ合わせる。更に片側には目印穴と思われる穿孔がある(中央4孔)。 [遺存状況] 側板の一部、接合部。各辺、破断面の可視性あり。長(現状)25.7cm、幅(現状)2.7cm、厚0.3cm
18	104	陶器 壺	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: やや粒状の施部か、底に残る。釉は発達して不透明。色調も含めて露部船との区分不明確。器表は灰色。／ [成形・調整] 粘結成形。底部へ切り離す。／ [特記] 横小窓。／ [遺存状況] 口縁部の一部を欠く。口縁部後3.6cm、底部径2.4cm、器高2.8cm
18	137	鉄器 鉗	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 材質: 鉄 [遺存状況] 全面に土砂鈎着し、形状の詳細不明。長(現状)7.6cm
18	141	鉄器 鉗	IJKM5 井側 内(下部)	[材質(船士・施成)] 材質: 鉄。 [特記] U字形に曲がる。縫孔。／ [遺存状況] 土砂鈎着し、形状の詳細不明。片側を欠く。長(現状)5.6cm
18	171	銅鏡「元豐通寶」(初鋤1078(北宋))	IJKM5 井戸 頂方	[遺存状況] 完存
18	176	土製品 石鍬	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 密緻、孔隙多め発生。器表: にぶい橙色 [10Y 7/3]。／ [成形・調整] 指押さえが部分的に残る。全体に平滑に仕上げる。長輪にうず穿孔(径2mm)。 [特記] 細縫部。細みの付着物。／ [遺存状況] 片側の1/3、他の端方。長(現状)3.7cm、径1.2cm
18	180	石器/器具 石鍬	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 石材: 石南石。／ [成形・調整] 外面に、周回方向の縫直(灣より上)、湾付近に工具尖端痕跡があり、施部器具の工具使用したものか。現状は使用中の研磨によるもののか。平滑化。削り取り出し。内側使用によるものか。平滑。／ [特記] 外面以外、一面に煤付着する物。背面以上は、研磨したもののかも、痕跡が残る。 [遺存状況] 体部細片
18	222	土器器 瓢	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 相砂・細縫部と顯著に含む花崗岩起源がかり。表面に似た風景画 [7.5Y 6/4]。器表: 全体にぐんざらんような七面でにぶい黄澄色 [10Y 5/3]。／ [成形・調整] 内外面周回方向に断続する胸毛目施加。口縁部付近の外側から口縫まで撫で調整。口縁部上端面タタキ目(縫目)。／ [特記] 口縁部上端面から外側に付着する。体部は模様。／ [遺存状況] 口縁部細片。厚(体部)0.8cm
18	223	瓦器 瓢 檻葉型5	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 密緻、薄面薄層状で縫孔を生じ。灰白色 [2.5Y 7/4]。器表: 内外面とも灰褐色 [N 4/4]。／ [成形・調整] 施部細部は、ガラス状吹き出しを呈し、わざかに青みのかった灰白色。／ [成形・調整] 内外面に型壓した花文。口肩部は、内外面、上面面の3方に分けて、施部前後に削り取る。 [遺存状況] 口縁部細片。厚(体部)0.2cm
18	224	瓦器 瓢	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 密緻、それに粗砂を含む。断面灰白色 [2.5Y 7/1]。器表: 灰色 [N 4/4]。／ [成形・調整] 内外面とも周回方向に断続する撫で調整(明瞭な条痕を残す)→内面: 縫に折す追跡感、間隔が空く。 [遺存状況] 口縁部小片。厚(体部)0.2cm
18	225	白磁 瓶 X類 (13c中頃~14c初頭)	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 密緻均質、断面白色。瓶袖: 内外面に薄く掛かり。発達して半透明。施部細部の表裏は、ガラス状吹き出しを呈し、わざかに青みのかった灰白色。／ [成形・調整] 内外面に型壓した花文。口肩部は、内外面、上面面の3方に分けて、施部前後に削り取る。 [遺存状況] 口縁部細片。厚(体部)0.8cm
18	228	白磁 瓶 IV類 (11c後半~12c前半)	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 緩密、孔隙を生じる。断面灰白色 [2.5Y 8/1]。種: 内外面に薄く掛かる。わざかに発見してにぶいガラス状光沢を呈す。施部細部の器表灰白色 [5.7V 2/1]。／ [成形・調整] 施部細部の外方に周回方向に断続する撫で調整(明瞭な条痕を残す)→内面: 縫に折す追跡感、間隔が空く。 [遺存状況] 口縁部細片。厚(体部)0.2cm
18	232	陶器 壺 I類 (13c)	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 相砂・細縫部を含む。断面は灰褐色 [2.5W 4/2]、芯部は黒色。内外面に施部が掛かる。口縁部は底で、外面体部は芯。釉は発達して不透明。施部細部の器表は色調が変化に富むが、体部ではナリゾー黒色 [2.5V 3/1] を呈す。／ [成形・調整] 内外面とも周回方向の撫で調整。後内部は内方に折り曲げ施加を肥厚させる。 [遺存状況] 口縁部細片
18	233	陶器 壺 III類 (13c)	IJKM5 井戸 頂方	[材質(船士・施成)] 船士: 相砂・細縫部を含む。断面はにぶい赤褐色 [5W 5/4]、芯部は灰褐色 [N 5/4]。／ [成形・調整] 内外面とも周回方向の撫で調整。後内部は外方に曲げ。内外面に跨び状に粘土を貼り足して形成しているよう見える。 [遺存状況] 口縁部細片。厚(体部)1.2cm
18	235	土器器 皿	IJKM5 井側 内(下部)	[材質(船士・施成)] 船士: やや粒状性あり。粗砂を含む。器表: にぶい赤褐色 [7.5W 7/3]。／ [成形・調整] 撫で調整。外底部下に回転利用。底部希少に離す。 [遺存状況] 口縁部細片
18	236	土器器 瓶	IJKM5 井側 内(下部)	[材質(船士・施成)] 船士: やや粒状性あり。均質。器表、色調のむらがある。外面ににぶい橙色 [7.5W 7/4]。／ [成形・調整] 内外面とも周回方向の撫で調整。回転利用か。 [遺存状況] 口縁部細片

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺 物 記 述
18	317	部材 軸受け部	I区M6 井側内	〔材質(新土・焼成)〕木材: カシ(志去り材)／〔成形・調整〕端面が四輪により磨耗して、乳頭状を呈す。本来は圓上の上方、裏面側広がる形状であったのかもしれない。上端面は、平滑。裏面は荒れ若しくは未調整の状態である。本来の形状は不詳であるが、磨耗部の形状からして図示した位置に配置する部材であった可能性が高い。(遺存状況) 完存 長7.0cm、幅2.8cm、厚2.4cm
19	76	杭状の木器	I区M6 井側内	〔材質(新土・焼成)〕広葉樹か、丸木本材(樹歴残数)。／〔成形・調整〕表面丸木の先端部を斜めに大きめにそぎ取り側縁を取りした後、先端部を更に一段細く削る。最先端部の断面は端円形状を呈す。(遺存状況) 先端部 長(現状)8.3cm、幅2.8cm、厚2.2cm
19	237	土師器 黒	I区M6 井側内	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。粗砂を小量含む。器表にびい褪色(7.5YR 7/4)。／〔成形・調整〕体部内外面: 周囲方向の擦で調整。一内底面: 注水する際で調整。底部端より離し、やや凸状、周囲方向の擦が回るが、細毛目調査と見える。〔特記〕はか物に比して、遺存状態がよくなない。器表に付着物を生じていること、古い時期に属するものか。(遺存状況) 小破片、器表やや荒れ。口縁部径(復原)8.8cm、底部高(復原)6.7cm、器深1.2cm
19	239	土師器 黒	I区M6 井側内(下半部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。粗砂を極小量含む。器表にびい褪色(7.5YR 7/4)。／〔成形・調整〕内底面・内底面周間に周囲方向の擦で調整。内底面に底部系切り離し。(遺存状況) 1/4の破片、器表の遺存品。口縁部径(復原)2cm、底部高(復原)6.7cm、器高1.1cm
19	240	束腰系須恵器 片口鉢	I区M6 井側内(下半部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。粗砂を極小量含む。器表にびい褪色(7.5YR 7/4)。／〔成形・調整〕内底面・内底面周間に周囲方向の擦で調整。断面は斜状。器表: 褪色(7.5YR 6/6)。／〔成形・調整〕外表面: 周囲方向の擦で調整。外表面に顯著な条線が残る。〔特記〕粘土:／(遺存状況) 1/3周の破片
21	242	土師器 黒	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。やや粒状性あり。まれに粗砂を含む。器表にびい褪色(7.5YR 7/3)。／〔成形・調整〕内外面とも周囲方向の擦で調整。底部系切り離し。(遺存状況) 小破片 口縁部径(復原)6cm、底部高(復原)6cm、器高1.2cm
21	243	土師器 黒	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。やや粒状性あり。粗砂を含む。断面は斜状。器表: 褪色(7.5YR 6/6)。／〔成形・調整〕内底面とも周囲方向(輪轉)で調整。外表面に顯著な条線が残る。〔特記〕周囲方向の擦で調整→注水する際で調整。底部系切り離し。(遺存状況) 1/4周の破片 口縁部径(復原)8.2cm、底部高(復原)7.7cm、器高1.2cm
21	244	土師器 黒	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。やや粒状性あり。器表: びい褪色(7.5YR 7/3)。内底面黒化、底盤が荒れるが、黒化部は器底面上に層状の分布がある。／〔成形・調整〕体部内外面・内底面周囲方向の擦で調整。底部系切り離し。／〔特記〕外表面・内底面に黒化。内底面では器表の黒化部と層なり不明瞭。内外面とも特別な形状を示さない。窓墨のような技法か。(遺存状況) 1/4周の破片 口縁部径(復原)12.3cm、底部高(復原)9.3cm、器高2.3cm
21	245	常滑窑陶器 瓢	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。粗砂と細砂を顔面に含む。断面層状を呈し、色調も層状に変化。芯部は自然釉。細胞状光沢から灰状の無光沢部まである。器表: は被覆物の無いと思われる内面は暗褐色(104 4/1)、断面も同色。／〔成形・調整〕口縁は、一端外方におり窓墨。更に端部に情状に折り入りて、形態・内面側に受部を形成している。(遺存状況) 口縁部破片
21	246	陶器 瓢	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。底盤で均質。断面灰赤色(2.5YR 5/2)。全体に器表から一定の深さまで断面に変化(色調や厚さ)がある。内面から裏面高台付近までの体部に薄く剥落する。内面は細砂りが顔面。釉は不明。施釉部はびい黄褐色(10YR 4/2)。施釉部の縁部は黒褐色(10K 2/2)。施釉の外表面は明赤褐色(2.5YR 5/6)を呈す。／〔成形・調整〕体部: 内底面では引削を利用した擦で調整。底部付近の体部から外底面の周縁部では軽削すり削り調整を行い、低い高台を削り出す。内底面には、周間を開けて、高台部(復原)11.5cm
21	247	青白磁 合子(蓋)	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。灰白色。釉: 内外面に薄く擦かる。口縁部から外表面端までを施前から引き取る。釉は発泡して透明。施釉部の器表は青白いのある灰白色。／〔成形・調整〕外表面: 天井部と体部の境界を両側から削りだして條の強弱を形成。体部には半剛リ状の唐草文。内面: 周囲方向の擦で調整。(遺存状況) 口縁部小破片
21	248	白磁 瓢 IX類	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。均質。断面灰白色(白に近い)。釉: 内外面に薄く均一に掛かる。器表は白透明で、ガラス状光沢を呈す。施釉部の器表は白い。施釉部の器表はオーリーブ灰(5GY 6/2)を呈す。／〔成形・調整〕外表面: 体部に縦の隙間(挿み出したもののかけ離れて)で開けた隙間に掛かる。口縁部(4周)の破片
21	249	白磁 黒 IX類 (13c後半~14c前半)	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。均質。断面灰白色。釉: 内外面に均一に掛かる。わずかに発泡して、透明。ガラス状光沢を呈す。施釉部の器表は灰白色(10Y 7/1)。／〔成形・調整〕焼成前に口唇部内外面の釉を削り取る(面を形成)。(遺存状況) 口縁部細片
21	250	龍泉窑青釉 瓢	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。断面灰白色(10YR 7/1)を呈す。釉: 内外面に厚く掛かる。回部は特に厚い。釉は発泡して半透明。ガラス状光沢を呈す。施釉部の器表はオーリーブ灰(5GY 6/2)を呈す。／〔成形・調整〕外表面: 体部に縦の隙間(挿み出したもののかけ離れて)で開けた隙間に掛かる。口縁部(4周)の破片
21	251	龍泉窑系青磁 瓢 I類 (12c中頃~後半)	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。やや粒状性あり。細孔を有する。断面灰白色。釉: 内外面に厚く掛かる。釉は頗るに発泡し、半透明。にぶいガラス状光沢を呈す。施釉部の器表はオーリーブ灰(5GY 6/2)を呈す。／〔成形・調整〕外表面: 体部に縦の隙間(挿み出したもののかけ離れて)で開けた隙間に掛かる。口縁部(4周)の破片
21	252	龍泉窑系青磁 瓢 II類 (13c前後~後半)	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。断面灰白色。釉: 内外面に均一に掛かる。発泡して半透明。断面灰白色(10YR 4/1)を呈す。釉: 内外面に水波を生じる。施釉部の器表は灰みの黄緑色。／〔成形・調整〕外表面: 縦方向帯状の面取り後、蓮弁輪郭を削り縁部を立てる。釉下のため詳細不明。体部中位に上塊発融し、内面: 底部近くに1周縁を削む。(遺存状況) 口縁部細片 口縁部小破片
21	253	龍泉窑系青磁 瓢 III類 (13c中頃~14c初頭)	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。粒状性あり。断面灰白色(7.5YR 7/1)、孔隙生成。釉: 内外面に均一に厚く掛かる。釉は頗るに発泡し、半透明。にぶいガラス状光沢を呈す。施釉部の器表はオーリーブ灰(5GY 6/2)を呈す。／〔成形・調整〕外表面: 縦方向帯状の面取り(1周)により断面が拡大する。釉下のため詳細不明。内面に隙による花纹。(遺存状況) 口縁部細片 口縁部小破片
21	254	龍泉窑系青磁 瓢 IV類 (13c中頃~14c初頭)	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。粗孔生成。断面灰白色。釉: 内外面に厚く掛かる。釉は発泡して半透明。ガラス状光沢を呈す。施釉部の器表は、綠灰色(10G 6/1)。／〔成形・調整〕外表面: 縦方向帯状の面取りにより多方向に整形削除形面により、蓮弁を削り、縁部を立てる。(遺存状況) 口縁部細片 口縁部(復原)14.6cm
21	255	陶器 瓢	I区M7 井側内(上部)	〔材質(新土・焼成)〕粘土質。粗砂を含む。断面層状で孔隙を生じる。橙色(5GY 6/2)。／〔成形・調整〕内底面: 体部内外面を削るによる整形。(遺存状況) 底部 底部径10.8cm

表4 報告遺物観察表

35

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物記述
21	256	土師器 环	11KM7 井側 脇方(上部)	[材質(胎土・焼成)] 胎土: やや粒状性あり、粗砂・細砂を含む。断面では孔隙を生じる。器表: にぶい橙色 [7.5YR 7/3]。/[「形成・調整」] 体部内外面に周回方向の撫で調整。底部糸切り離し。/[「特記」] 内底面に墨書き。文字から駒柄が不明。折り返す駒の動きは見て取ることができる。/[「遺存状況」] 底部小破片・底部径(復原)6.0cm
21	259	須恵器 盖 (8c前半)	11KM7 井戸 脇方(上部)	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 均質。器表: 灰色 [5Y 6/1]。/[「形成・調整」] 内外面・撫で調整。/[「遺存状況」] 口縁部破片、器表や芯丸。
21	260	白磁 直口2類 (11c後半~12c前半)	11KM7 井73 脇方(上部)	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 均質、黑色粒、細孔生成。断面白に赤い灰白色。釉: 内面から口縁部底までの外縁まで掛かる。一部は垂れて体部中程に及ぶ。発泡して半透明。ガラス状光沢を呈す。/[「形成・調整」] 内面内底面に高台より少しの片割りの箇限。底部は浅く削り込んだ駒筋底。/[「遺存状況」] 口縁部の一部~底部の破片・口縁部径(復原)18.1cm、高台部径2.5cm、器高2.2cm
21	320	曲物 側板部材	21KM7 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 研磨種: ヒノキ(もしくはスギ、桟木材)。/[「遺存状況」] 断片、四辺を欠失か。長(現状)9.4cm、幅(現状)3.4cm、厚(現状)3cm
23	113	龍泉窯系青磁 牙皿類 (13c中頃~14c初頭)	11KM8 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 鮮紅を生じる。釉: 全面に掛かり、凹部には厚く溜る。輪は発泡して半透明。にぶいガラス状光沢を呈す。施釉部の器表はオーラー色 [10Y 6/3]。/[「形成・調整」] 外面・体部に横造文、輪郭の整形方法は不明、輪郭は描きき。内面・内底面の縁部に横造文により輪郭、内部に魚文を貼り付ける。配置から見て双魚文が。/[「遺存状況」] 1/4周以下、底部(2.2cm)。口縁部径(復原)11.1cm、高台部径1.1cm、器高3.6cm
23	114	瓦器 足繩か	11KM8 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、まれに粗砂を含む。器表: 成灰色 [2.5Y 8/1]。/[「形成・調整」] 軸方向に沿う撫で調整、部分的に面取り。/[「特記」] 直立する体部につくよう位置関係が考案される(「京都市」)是れか。/[「遺存状況」] 脚部
23	183	石器/器具 石臼	11KM8 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 石材: 硬岩灰岩か。/[「形成・調整」] 加壓による粗い調整、部分的に工具椎が残る(鉤嘴状工具か)。/[「遺存状況」] 内面は平滑。/[「遺存状況」] 底部破片(復原)15.6cm
23	261	土師器 皿	11KM8 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: やや粒状性あり、断面团块状。器表: にぶい黄褐色 [10YR 7/3]。/[「形成・調整」] 内面から内底面まで周回方向の撫で調整。底部糸切り離し。/[「遺存状況」] 1/3周の破片・口縁部径(復原)7.6cm、底部径(復原)6.0cm、器高1.2cm
25	131	鉄器 釘	11KM9 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 材質: 鉄。/[「形成・調整」] 頭部折り曲げか。/[「遺存状況」] 全面に土砂が薄く詰着、形状詳細不明。長6.7cm
25	264	土師器 环	11KM9 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: やや粒状性あり、粗砂を含む。器表: にぶい橙色 [7.5YR 6/4]。/[「形成・調整」] 体部内外面~内底面周回方向の撫で調整。底部糸切り離し。/[「遺存状況」] 1/4周の破片・口縁部径(復原)11.1cm、底部径(復原)8.5cm、器高2.1cm
25	265	龍泉窯系青磁 盆	11KM9 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 均質、細孔を顯著に生成。断面: 灰白色 [7.5YR 6/1]。/[「形成・調整」] 内外に厚く掛かる。発泡して半透明。にぶいガラス状光沢を呈す。内外面に水没生成。施釉部の器表は灰みの青緑色 [5GY 5/3]。/[「形成・調整」] 口縁部底下面にて削裁削り調整。/[「遺存状況」] 口縁部破片
25	267	陶器 舗 皿類 (13c前半)	11KM9 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 粗砂を頗著に含み、断面团块状。にぶい赤褐色 [5YR 4/4]。釉: 外面に厚く掛かる。発泡して不透明。釉の厚い部位の器表はガラス状光沢を呈し、灰オーラー色 [7.5Y 6/2]。/[「形成・調整」] 内外面周回方向(削裁)を利用して撫で調整。/[「遺存状況」] 口縁部破片
27	120	土師器 皿	21KM10 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、褐色粗粒を稀に含む。器表: 棕色 [7.5YR 7/6]。/[「形成・調整」] 体部内外面・内底面周回方向の撫で調整。→内底面周回方向の撫で調整。底部糸切り離し→板目压痕。/[「遺存状況」] 1/4周をく。口縁部径9.2cm、底部7.0cm、器高1.3cm
27	271	土師器 环	21KM10 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: やや粒状性あり、まれに粗砂、褐色粗粒を含む。器表: 上半部棕色 [5YR 6/6]、下半部にぶい褐色 [7.5YR 7/3]。/[「形成・調整」] 体部内外面、内底面周回方向の撫で調整→往復方向の撫で調整。底部糸切り離し→板目压痕。/[「遺存状況」] 小破片・口縁部径(復原)14.1cm、底部径8.5cm、器高3.1cm
27	272	土師器 环	21KM10 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、まれに暗褐色を含む。断面中央に断面を生じる。器表: にぶい褐色 [7.5YR 6/2]。/[「形成・調整」] 内外面周回方向の撫で調整。底部糸切り離し→撫で調整→板目压痕。/[「遺存状況」] 1/4周の破片
30	116	土師器 环	21KM11 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、稀に粗砂を含む。器表粉状剥落。器表: 黄色 [2.5YR 7/2]。/[「形成・調整」] 体部内外面で調整、外面では口縁部付近と底部付近で縮く体部には荒い条線が巡回する。外側の撫で調整後削り工具を用いたものと見える。工具は板状の刷毛目調査工具。あるいはサリヤシのものかも。閉面部の断面形が曲面を示す部位がある。内底面では周回方向の撫で調整→往復方向の撫で調整。底部糸切り離し→板目压痕。底部糸切り離し。/[「遺存状況」] 1/2周進化。口縁部径12.4cm、底部径9.0cm、器高3.0cm
30	117	土師器 环	21KM11 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、稀に粗砂を含む。器表: にぶい黄褐色 [10YR 7/3]。/[「形成・調整」] 体部内外面、内底面周回方向の撫で調整。器表に波状の凹凸を残す。/[「遺存状況」] 1/2周をく。口縁部径12.5cm、底部6.0cm、器高2.5cm
30	118	土師器 皿	21KM11 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、粗砂を含む。器表: 灰白色 [10YR 8/2]。/[「形成・調整」] 体部内外面、内底面周回方向の撫で調整。底部糸切り離し。/[「遺存状況」] 完存。器表や芯丸荒れ。口縁部径7.9cm、底部径5.8cm、器高1.3cm
30	184	石器/器具 砥石(板状)	21KM11 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 石材: 砂岩か。/[「形成・調整」] 板状を呈し、断面長方形。表裏面に底面が残る。裏面は、細い擦痕など残り。古い歯面若くは、整形前の切削面と見える。樓部分は面取りしたようになっており、ここでも使用したもののか。/[「遺存状況」] 両端欠・長(現状)5.5cm、幅(現状)3.6cm、厚(現状)1.0cm
30	275	土師器 皿	21KM11 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、稀に粗砂を含む。器表: にぶい黄褐色 [10YR 7/2]。/[「形成・調整」] 体部内外面、内底面に周回方向の撫で調整→内底面に往復方向の撫で調整。底部糸切り離し。/[「遺存状況」] 1/3周の破片・口縁部径(復原)18.0cm、底部径6.1cm、器高1.2cm
30	276	土師器 皿	21KM11 井側 内	[材質(胎土・焼成)] 胎土: 細密、粗砂を含む。器表: にぶい黄褐色 [10YR 7/2]。/[「形成・調整」] 体部内外面、内底面に周回方向の撫で調整。底部糸切り離し。/[「遺存状況」] 2/3周の破片・口縁部径7.8cm、底部径6.0cm、器高1.3cm

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺 物 記 述
30	277	土師器 盆	2区M11 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：やや粒状性あり、粗砂をわずかに含む。器表：にぶい淡褐色〔10YR 7/2〕。／〔成形・調整〕 内外面、内底面に周回方向の撫で調整。底部系切り離し。／〔特記〕 平面形不整で梢円形状を呈す。／〔遺存状況〕 1/4周を欠く。 口縁部径8.0cm、底部径5.6cm、厚さ1.5cm
30	285	土師器 环	2区M11 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：やや粒状性あり、粗砂を含む。器表：明褐色〔7.5YR 7/6〕。／〔成形・調整〕 体部内外面周回方向の撫で調整。底部系切り離し。／〔遺存状況〕 1/3周の破片・口縁部径(復原)11.6cm、底部径(復原)9.0cm、厚さ2.6cm
30	286	土師器 环	2区M11 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：微細、粗砂～細繊維を含む。器表：淡黄褐色〔7.5YR 8/3〕。／〔成形・調整〕 体部の外面、内底面周回方向の撫で調整→内底面に往復方向の撫で調整。底部系切り離し→板目压痕。／〔遺存状況〕 1/2周の破片・口縁部径(復原)12.0cm、底部径(復原)9.0cm、厚さ2.7cm
30	287	土製品 瓦玉	2区M11 井戸 竈方(湯水面 以上)	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：粗砂を含無。断面灰白色〔5Y 6/1〕。／〔成形・調整〕 瓦片利用、全周を打ち欠き、不整な円筒形に整形。原瓦となつた直は平瓦、面間に布目有、凸面は撫で調整する。／〔遺存状況〕 全存長(規復)1.9cm、幅9.0cm、厚さ1.6cm
30	319	遊具 木球	2区M11 井側内(下部)	〔材質(船土・焼成)〕 木材：カシか【持ち手付】／〔成形・調整〕 円筒状に切断した丸木材の両端を、細かく面取りして斜面状に彫刻。画面も面取りを加えて、寸詰まりの状態に整形している。／〔特記〕一部焼成。／〔遺存状況〕 半ば欠、腐食進行軟化。長5.1cm、径4.7cm
34	46	蓋若しきは曲物底板	2区M12 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 木材：針葉樹(スギ)か。狂目材。／〔成形・調整〕 板に形態、縁部は面取り。／〔遺存状況〕 破片・長(規復)25.8cm、幅(規復)6.5cm、厚0.9cm
34	119	土師器 环	2区M12 井戸 竈方(湯水面 以上)	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：粒状性あり、稀に粗砂を含む。細繊維を顕著に含む。器表：にぶい淡褐色〔7.5YR 6/4〕。／〔成形・調整〕 体部内外面、内底面に周回方向の撫で調整。波状を呈する外縁の状態からすると回転利用→内底面に往復方向の撫で調整。底部系切り離し→板目压痕。／〔遺存状況〕 上部の大部分を欠く。 口縁部径(復原)12.4cm、高さ(規復)8.7cm、厚さ25mm
34	145	鉄器 钉	2区M12 井戸 竈方(湯水面 以上)	〔材質(船土・焼成)〕 材質：鉄〔遺存状況〕 全面に土師錆着し、形状の詳細不明。長7.8cm
34	288	瓦器 瓶	2区M12 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：やや粒状性あり、均質、稀に粗砂を含む。断面灰白色〔2.5Y 7/2〕、瓶状。器表：焼成により黒色、部分的に暗紅色。／〔成形・調整〕 外面：周回方向の撫で調整。内面：周回方向の捺磨き調整。間隔を空ける。／〔遺存状況〕 口縁部1/4周の破片・口縁部径(復原)11.4cm
34	289	白磁 水注 III(2・3)類 (13c~14c前半)	2区M12 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：断面は粒状性あり、孔隙を生じ、灰白色を呈す。軸：内外面に均一に撫かれて滑らか。袖は、発達して透明、外面に水翼、にぶいグラス状光沢をもつ。底輪部は灰白色〔SW 7/11〕。／〔成形・調整〕 縫織引き上げか、断面模様を呈す。／〔遺存状況〕 口縁部細孔部径(復原)0.8cm
34	290	龍泉窯青磁 瓶 II類 (13c前半)	2区M12 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：断面平滑。細かな孔隙を生じる。灰色。軸：内外面に均一に撫かれ。回転部は摩たっくたまま現れている。発達するが、透明、グラス状光沢を呈す。底輪部の器表はオブリーク灰色〔SGV 6/1〕。／〔成形・調整〕 外面では、縫方向に帯状の面取り→片彫りにより花口を焼き、縫跡等を構成。内部：体部中位に、周回方向断続する回線。／〔遺存状況〕 口縁部小破片・口縁部径(復原)16.6cm
34	291	土師器 环	2区M12 井戸 竈方(湯水面 以上)	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：やや粒状性あり。粗砂、褐色粗糸を小量含む(褐色粗糸がやや多い)。器表：淡黄褐色〔10YR 8/3〕、上面に少し褐色〔7.5YR 7/4〕。／〔成形・調整〕 体部内外面、内底面に周回方向の撫で調整。底部系切り離し。体部内面が彫れている段階で口縁から底面に向かって施釉付の工具4箇(4)。内底面にも同様の工具痕。削痕の片割合も全然。後成後、口縁部直下の部に対する位置内外面から、回転工具による穿孔。両方向とも未貫通。先位置は互い違いの関係となっている。／〔特記〕 口縁・口縁部径(復原)13.4cm、底輪部径4.4cm、高さ2.7cm
34	292	土師器 瓶	2区M12 井戸 竈方(湯水面 以上)	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：断面は粒状性あり、粗砂・褐色粗糸を多量に含む。器表：付着物の無いと思われる部分で、にぶい褐色〔5YR 5/4〕。／〔成形・調整〕 材部の両端を細く削りだす。中央部の断面が丸形で、器表が形状をそのまま利用したものか。／〔成形・調整〕 器表の両端を細く削りだす。／〔遺存状況〕 瓶
34	327	木器/器具 署	2区M12 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 木材：針葉樹(スギ)か。瓶口部を年輪に沿って手削りして素材としたものか。／〔成形・調整〕 材素の両端を細く削りだす。中央部の断面が丸形で、器表が形状をそのまま利用したものか。／〔成形・調整〕 材素の両端を細く削りだす。／〔遺存状況〕 日本完形、折れ(2箇所)。長(規復)15.3cm、幅(規復)5.5cm、厚さ0.5cm
34	329	木器/器具 署	2区M12 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 木材：針葉樹(スギ)か。／〔成形・調整〕 材素に表面を削り取る。／〔遺存状況〕 瓶
35	293	土師器 环	2区M14 上部	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：粗砂を含む。断面灰白色〔10YR 8/2〕。器表：にぶい淡褐色〔10YR 7/4〕。／〔成形・調整〕 外面：口縁部に周回方向の撫で調整。底部系切り離し→板目压痕。／〔遺存状況〕 1/4箇の破片・口縁部径(復原)12.8cm、底部径(規復)2.8cm
35	294	瓦器 瓶 (12c後半)	2区M14 上部	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：粒状性あり。砂粒が凝りじ(小径)。断面灰白色〔7.5Y 7/1〕。／〔成形・調整〕 外面：口縁部に周回方向の撫で調整。底部系切り離し→板目压痕。／〔遺存状況〕 口縁部細片
35	295	龍泉窯青磁 瓶 I類 (12c中頃~後半)	2区M14 上部	〔材質(船土・焼成)〕 勝土：微細、断面灰白色。軸：体部内外面に均一にかかり。外面から高台内面まで及ぶ。費付にも残る。発達して半透明、にぶいグラス状光沢を呈す。施釉部の器表はオブリーク灰色〔7.5Y 6/2〕。／〔成形・調整〕 外面：底部付近は回転鉛削り調整。内底面縁部に圓錐、切り込み状。高台基部は側面を削り込んで整形。／〔特記〕 内底面の中心部を中心として器表が削減して、磨ガラス状を呈す。使用によるものか。／〔遺存状況〕 底部・高台部径6.7cm
36	44	木器/器具 下駄	2区M15 井側内	〔材質(船土・焼成)〕 木材：針葉樹(スギ)木板目材。／〔成形・調整〕 長軸に平行で二刀式を切削。その中心軸に馬の足があるのは、固定用の筋穴か。前部ではさらにに孔に平行した左右各2箇に板釘を打ち込んで固定しているものと見える。筋孔跡は前部・後部2箇所。前部の孔は小さい。後部の孔には、繊維を固定したものと考えられる木栓が残る。／〔特記〕 前部鼻緒孔部に、複数の面があり、指正痕などみると、大きさの配列から、本資料は足用と考えられる。／〔遺存状況〕 下部の大部分、後部を欠く。長(規復)22.2cm、幅(規復)8cm、厚(規復)2.1cm

表6 報告遺物観察表

37

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺物記述
36	45	木器／部材 穿孔のある木板	2IKM15 井側内	[材質(船士・後成)] 材質：針葉樹(シギカ)、木目に沿って割り取った板材。／【整形・調整】両端取り切りか。長方形材の中央部。片側端間に寄った位置に1孔を穿つ。孔径は長軸方向の位置に極端に凹部形成、縫合せ痕か。長さ14.0cm、幅3.8cm、厚さ0.4cm
36	296	土師質土器 耳罐か	2IKM15 井戸脇方	[材質(船士・後成)] 船士：粗砂を大量に含む(粒径は比較的均一)。断面柱状。器表：にぶい褐色(7.5YR 6/4)。／【成形・調整】口縁部の外表面が一部削除し、やや外方に開く(破片)ため全体の形状は不明。外面：口縁部に沿う方向の擦で調整。内面：刷毛目調整→擦で調整(ばね)れも口縁部に沿う方向。／【特記】壺の焚口部底の可能性。／【遺存状況】口縁部細片
36	298	須恵器 壺	2IKM15 井戸脇方	[材質(船士・後成)] 船士：細密、粗砂が多く混じる。断面柱状。器表：灰白色。／【整形・調整】内外面、口唇部周回方向の擦で調整。外面部の一端、肩部部：薄いガラス状光沢をもつ砂状の残存物。／【特記】肩部である可能性。／【遺存状況】口縁部細片
36	299	瓦器 壺 (12c)	2IKM15 井側内	[材質(船士・後成)] 船士：細密、粗砂までの砂粒を多く含む。器表：灰白色(5Y 6/1)。／【成形・調整】高台底面に刃差し離し痕。高台粘付け。内面：滑落で、体部下半部に縛て当直。内外面に、擦で調整(器表を削らして)。高台貼り付け。内面に縛て当直。／【遺存状況】底盤
38	194	瓦器 壺 大和型(III B期) (13c前半)	2IKM16 確認時	[材質(船士・後成)] 船士：粒状性繊著な細かな砂粒を網著に含む。断面斜状。器表：外外面とも滑り、灰色(7.5Y 6/1)。／【成形・調整】内底面に刃差し離し痕。高台粘付け。口縁部直径5.6cm
41	105	白磁 皿 IKM1類 (14c前半)	2IKM17	[材質(船士・後成)] 船士：細密、孔隙を生じる。断面：灰白色(7.5Y 7/1)。種：全面に施釉。むらが網著で、部分的に露頭部がある。釉上装飾して半透明、細密光沢を呈す。施釉部の器表灰白色。(5Y 7/1)。／【成形・調整】内底面棘部を帯状に削り込み1個隔設を設ける。施釉後、後成前に口縁部端の釉を剥ぎ(取り)取る(面の面取り)。／【遺存状況】1/4周を大きく口縁部径10.7cm、底盤径6.2cm、器高2.0cm
41	106	土師器 壺	2IKM17	[材質(船士・後成)] 船士：やや粒状性あり。器表：にぶい褐色(7.5YR 7/4)。／【整形・調整】体部内外面：周回方向の擦で調整。底部系切り離し→板目圧痕。／【遺存状況】1/2周を欠く。口縁部径14.4cm、底盤径10.0cm、器高2.9cm
41	107	土師器 皿	2IKM17	[材質(船士・後成)] 船士：細粒性あり、粗砂を含む。器表：にぶい褐色(7.5YR 7/4)。／【整形・調整】体部内外面周回方向の擦で調整。内底面往復方向の擦で調整。底部系切り離し→板目圧痕。／【遺存状況】接合、部分欠。口縁部径9.2cm、底盤径6.6cm、器高1.2cm
41	108	土師器 壺	2IKM17	[材質(船士・後成)] 船士：細密、粗砂をやや網著に含む。断面斜状、器表を生じる。器表：にぶい褐色(7.5YR 7/4)。／【成形・調整】内底面に周回方向の擦で調整。底部に高台を貼り付ける。高台の内外面、底面周回方向(回転)の擦で調整。／【遺存状況】脚部・高台部(復原)11.5
41	153	鉄器 金具か	2IKM17	[材質(船士・後成)] 材質：鉄／【成形・調整】水平・垂直方向に直角に曲がる。／【遺存状況】石砂鑄造。形状の詳細不明。折れ曲がる一面を欠く。長(現状)4.9cm、幅(複数)3.6cm
41	300	土師器 皿	2IKM17	[材質(船士・後成)] 船士：やや粒状性あり、粗砂を含む。器表：にぶい褐色(7.5YR 7/4)。／【成形・調整】体部内外面周回方向の擦で調整。内底面に往復方向の擦で調整。底部系切り離し→板目圧痕。／【遺存状況】1/3周の破片。口縁部径(復原)8.6cm、底盤径(復原)6.8cm、器高1.2cm
45	69	石器/器具 砕石	3IKM18 井側内	[材質(船士・後成)] 石材：花崗岩(アルミニウム)／【成形・調整】複円形凹溝両側中央部を打ち欠き。細掛かりの切跡を作り出す。／【特記】大形、碇石か。／【遺存状況】完存・長(現状)24.9cm、幅(6.4cm、厚12.3cm
45	161	鉄器 钉	3IKM18 井側内	[材質(船士・後成)] 材質：鐵／【遺存状況】全体に土砂鷲着。形状の詳細不明。先端部を欠く。長(現状)9.2cm
45	303	土師器 壺	3IKM18 井戸脇方	[材質(船士・後成)] 船士：粗砂を網著に含む。器表：にぶい褐色(10YR 6/4)。／【整形・調整】内外面撓で調整。縫穴成前穿孔。／【遺存状況】口縁部細片
45	304	東播系須恵器 楔鉢 (12c末葉～13c初葉)	3IKM18 井戸脇方	[材質(船士・後成)] 船士：粗砂を網著に含む。器表：にぶい褐色(10YR 6/4)。／【成形・調整】内外面撓で調整。細孔成前穿孔。／【遺存状況】口縁部細片
47	109	土師器 小形壺(小皿)	3IKM19 井側内	[材質(船士・後成)] 船士：細密、粗砂へ繊維を小量含む。繊維は黑色で、粗砂と異なる。器表：にぶい褐色(10YR 7/4)。／【成形・調整】体部内外面周回方向の擦で調整。内底面周回方向の擦で調整→中央に往復方向の擦で調整。底部系切り離し→板目圧痕。／【遺存状況】完存・長12.2cm、幅7.9cm、厚3.9cm
47	185	石器/器具 故石	3IKM19 井側内	[材質(船士・後成)] 石材：花崗岩(アルミニウム)／【成形・調整】複円形凹溝両側部を打ち削る。一部は連続して条線を成す。多面は中央部に平滑な面形成、やや凹面となっている。周囲との境界は不明瞭。／【遺存状況】完存・長12.2cm、幅7.9cm、厚3.9cm
47	305	土師器 皿	3IKM19 井側内	[材質(船士・後成)] 船士：やや粒状性あり、均質。器表：にぶい褐色(7.5Y 6/4)。／【成形・調整】体部内外面周回方向の擦で調整。内底面周回方向の擦で調整→接縫方向の擦で調整(複数の)。底部系切り離し→板目圧痕。／【遺存状況】1/4周の破片。口縁部径(復原)7.9cm、底盤径(復原)6.8cm、器高1.3cm
47	306	土師器 壺	3IKM19 井側内	[材質(船士・後成)] 船士：やや粒状性あり。器表：褐色(7.5YR 6/5)。／【成形・調整】体部内外面周回方向の擦で調整。内底面周回方向の擦で調整→往復方向の擦で調整。底部系切り離し→板目圧痕。／【遺存状況】1/4集の破片。口縁部径(復原)8.2cm、底盤径(復原)12.2cm、底部径(復原)8.8cm、器高2.6cm
48	110	東播系須恵器 楔鉢 (13c前半)	3IKM20 井側内	[材質(船士・後成)] 船士：粒状性網著(細砂を大量に含む)。粗砂へ繊維を小量含む。器表：灰色。／【成形・調整】内外面撓で調整、口縁部では周回する。／【遺存状況】上半部、1/4周の破片。口縁部径(復原)29.1cm
48	111	土師器 皿	3IKM20 井側内	[材質(船士・後成)] 船士：細密、粗砂へ繊維を含む。器表：浅褐褐色(10YR 8/3)。／【成形・調整】体部内外面周回方向の擦で調整。内底面周回方向の擦で調整→接縫方向の擦で調整。底部系切り離し→板目圧痕。／【遺存状況】1/2周の破片。口縁部径(復原)7.8cm、底盤径(復原)5.7cm、器高1.5cm
48	112	土師器 皿	3IKM20 井戸脇方(復元) 含む	[材質(船士・後成)] 船士：細密、粗砂へ繊維を含む。器表：浅褐色(7.5YR 8/4)。／【成形・調整】体部内外面・内底面周回方向の擦で調整。底部系切り離し。／【遺存状況】1/3周の破片。口縁部径(復原)8.1cm、底盤径(復原)15.5cm、器高1.2cm

図	遺物番号	遺物種別	出土位置	遺 物 記 述
48	173	龍泉窯青磁 瓶 H類 (13c前半)	3区M20 井戸 竪方	[材質(胎土・焼成)] 素土: 織密、断面灰白色。輪: 内外面から高台内の一部に及ぶ、比較的薄く均一。釉: 白発色するが透明。器表はガラス状光沢を呈す。施華部は灰オリーブ色 [7.5Y 6/2]。 〔成形・調整〕外側: 口縁部底下から縦に帶状の面取り→片割りにより花弁を描き、蓮弁文を構成。内底面: 莲瓣文の面取り。〔特記〕内底面の中央部は器表が摩れて格子ガラス状を呈す。 〔遺存状況〕下半部及び口縁部の一部 口縫部剥落(復原)16.1cm, 高台部剥落4cm, 器高6.4cm
48	174	土師器 环	3区M20 井戸 竪方	[材質(胎土・焼成)] 素土: やや粒状性あり、粗砂を小量含む。器表: にびい緑色 [7.5Y 7/4]。 〔成形・調整〕体内外面周回方向の撫で調整。内底面周回方向の撫で調整→直復方向の撫で調整。底部系切り離し→板目底版。口縫部平面横円形状を呈す。〔遺存状況〕口縫部剥落の1/2周を欠く、接合資料、器表がやれ、口縫部径9.0cm、底部径9cm、器高1.3cm
48	175	土師器 皿	3区M20 井戸 竪方	[材質(胎土・焼成)] 素土: 織密、粗砂を顕著に含む。器表: 棕色 [7.5YR 7/5]。 〔成形・調整〕体内外面周回方向の撫で調整。底部系切り離し→板目底版。口縫部平面横円形状を呈す。 〔遺存状況〕口縫部の1/2周を欠く、接合資料、器表がやれ、口縫部径9.0cm、底部径6.5cm、器高1.9cm
48	307	土師器 环	3区M20 井戸 内	[材質(胎土・焼成)] 素土: 織密、粗砂を顕著に含む。器表: にびい緑色 [7.5Y 7/4]。 〔成形・調整〕体内外面に周回方向の撫で調整→一定方向での削る撫で調整。内底面に周回方向の削る撫で調整。底部系切り離し→板目底版。〔遺存状況〕1/4周の破片、口縫部剥落(復原)13.2cm、底部径(復原)9.2cm、器高3.0cm
48	308	土師器 环	3区M20 井戸 内	[材質(胎土・焼成)] 素土: 粒状性あり、粗砂を僅かに含む。孔隙を生じる。器表: にびい黄褐色 [10YR 7/3]。 〔成形・調整〕体内外面、内底面周回方向の撫で調整。底部系切り離し→板目底版。〔遺存状況〕小破片 口縫部剥落(復原)13.0cm、底部径(復原)9.3cm、器高2.8cm
48	309	土師器 环	3区M20 井戸 内	[材質(胎土・焼成)] 素土: やや粒状性あり、粗砂、褐色粗粒を小量含む。器表: にびい緑色 [7.5Y 7/4]。 〔成形・調整〕外側に周回方向の撫で調整→内底面縁に沿う、斜め方向の撫で調整→内底面撫で調整(直面)。底部系切り離し。 〔遺存状況〕1/4周の破片 口縫部剥落(復原)12.7cm、底部径(復原)8.3cm、器高2.6cm
48	310	瓦質土器 壺	3区M20 井戸 内	[材質(胎土・焼成)] 素土: 粗砂と顯著に含み、断面灰黑色 [7.5Y 6/1]。芯部にはにびい黒褐色 [10YR 5/3]。 〔成形・調整〕輪: 極密、粗砂を小量含む。断面灰黑色 [7.5Y 6/1]。芯部にはにびい黒褐色 [10YR 5/3]。器表: 極密にしよじ黒色、部分的に米色。〔成形・調整〕外側: 周回方向の撫で調整。内面: 口縁に沿う方向の撫で調整。輪部に周回方向の羽毛目調整。口縫部では外側の調整→口縫部外面→内面の崩に進行。 〔遺存状況〕口縫部細片
51	115	土師器 环	3区拡張確認時	[材質(胎土・焼成)] 素土: 織密、粗砂を小量含む。断面灰黑色 [7.5Y 6/1]。 〔成形・調整〕体内外面に周回方向の撫で調整、外側には回転の跡跡が強く残る。内底面に周回方向の撫で調整→接縫方向に往復する撫で調整。底部系切り離し→板目底版の1/2周残り、底面平滑。 〔遺存状況〕1/4周を欠く。口縫部剥落(復原)11.7cm、底部径16.0cm、器高2.9cm
51	195	瓦器 皿	1区～G76- 2052K8地山 砂輪(足置 り層)G76- 3042	[材質(胎土・焼成)] 素土: 織密、粗砂と顕著に含む。断面は灰白色 [2.5Y 7/4]。器表: 内外面ともにしよじ黒色。 〔成形・調整〕体内外面に無干渉調整、外側には回転の跡跡が強く残る。内底面に周回方向の撫で調整→接縫方向に往復する跡跡調整(粗目)。 〔遺存状況〕1/4周の破片 口縫部剥落(復原)8.8cm、器高1.7cm
51	196	須恵器 环身 (6c中葉)	1区 遷移検 出時・復元	[材質(胎土・焼成)] 素土: 織密、特に粗砂を含む。器表: 灰色。 〔成形・調整〕内外面に周回方向の撫で調整、底部系貼付形成した痕跡が明瞭に残る。 〔遺存状況〕口縫部細片、器表が荒れ(全表面が磨耗)。
51	197	瓦器 瓢	探集	[材質(胎土・焼成)] 素土: 織密で、特に粗砂を含む。器表: 灰色により黒色。 〔成形・調整〕外側撫で調整。内面に口縁に沿う方向、斜め方向の跡跡調整。 〔遺存状況〕口縫部細片、器表荒れ。

報告書物索引(遺物番号順) 表8

遺物番号	報告回	遺物番号	報告回	遺物番号	報告回	遺物番号	報告回
14	14	126	14	204	14	243	21
27	18	127	15	205	14	244	21
44	36	131	25	208	14	245	21
45	36	137	18	211	14	246	21
46	34	141	18	213	14	247	21
69	45	145	34	214	15	248	21
76	19	153	41	215	15	249	21
101	15	161	45	216	15	250	21
102	15	171	18	217	15	251	21
103	15	173	48	218	15	252	21
104	18	174	48	219	15	253	21
105	41	175	48	220	15	254	21
106	41	176	18	221	15	255	21
107	41	180	18	222	18	256	21
108	41	183	23	223	18	259	21
109	47	184	30	224	18	260	21
110	48	185	47	225	18	261	23
111	48	192	9	228	18	264	25
112	48	193	11	232	18	265	25
113	23	194	38	233	18	267	25
114	23	195	51	234	14	271	27
115	51	196	51	235	18	272	27
116	30	197	51	236	18	275	30
117	30	200	14	237	19	276	30
118	30	201	14	239	19	277	30
119	34	202	14	240	19	285	30
120	27	203	14	242	21	286	30

報告書抄録								
ふりがな	はこざき 51							
書名	箱崎 51							
副書名	箱崎遺跡大76次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1318							
編著者名	杉山富雄							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2017年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
ひき 比恵遺跡群 (第135次)	ふくおかんふくおか 福岡県福岡市 ひかしきはこざきいっしょぐん 東区箱崎1丁目		市町村 40130	道路番号 2639	33°37'02"	130°25'19"	20150601 ~ 20150714	370 記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
比恵遺跡群	集落	中世	井戸16、土壙5		土師器、輸入陶磁器、 木器			
要約	<p>遺跡が立地する博多湾奥の砂丘の海に面したごく緩い傾斜面上で、遺跡西縁に近い地点に位置する。既存基礎により調査地のほぼ全体に破壊が及び、深く掘削された井戸、土壙等のみが遺存していた。井戸は掘跡状の掘方で、結核を井割として掘る構造のもので、複数がまとまる群が、東南東から西北西方向に帯状に分布する。出土遺物から、遺構の年代は13世紀後半から14世紀頃と考えられる。</p> <p>遺物は各遺構から、土器類が小量ずつ、殆どが細片で出土した。糸切底の土師器坏・皿類のほか、白磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗等の輸入陶磁器、束腰系須恵器、常滑陶器、瓦器等の移入土器が含まれている。下駄、曲物ほか部材等の木器類、銅錢、釘等の金属製品が少数であるが出土した。</p>							

箱崎 51

— 箱崎遺跡第76次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1318集

2017(平成29年)年3月27日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木2丁目16番24号